

平尾山古墳群平野・大県支群

—ミニゴルフ場建設に伴う—

1991年度

1992年3月

柏原市教育委員会

は し が き

柏原市の東山丘陵上には多数の古墳が存在しており、近畿地方で最も密集して造られている地域です。この中の1つである平野・大県古墳群は、生駒山地の西側丘陵上に在り、西麓部の集落遺跡と接しています。当古墳群の被葬者は、この西麓部に並び営まれた平野遺跡や大県遺跡に住んでいた豪族や氏族の長ではないかと考えられています。

今回、この平野・大県古墳群内でミニゴルフ場の建設が計画され、平成2年に試掘調査を実施し5基の古墳を発見しました。調査は、この結果に基づいて柏原市教育委員会が原因者負担による事業として実施したものです。

調査地は、河内平野が一望出来る標高200mの丘陵上に位置し、晴れた日には和泉葛城から六甲山地の山々まで見渡せ、百舌鳥古墳群や大阪城の天守閣もよく見えます。

調査した古墳は、後世の開墾によって石材の抜き取りや崩壊があり、よく遺存したものが少なかったけれど、横穴式石室として割合古式の部類に入ります。また、出土遺物も時期のわかる須恵器や土師器があり、鉄滓やかんざしの特種な部類の遺物もあり、当古墳群の時期や性格を示す貴重な資料となりました。

古墳の保存については、当初から幾度となく協議を持ち、事業者からご協力を頂きハイキング道路添いに2基の古墳を移設しました。また、これらの古墳は、一般市民の方に自由に見学出来るようにしてあります。

最後に、発掘調査ならびに整理事業にあたって、多くの関係各位、特に大阪府教育委員会文化財保護課、勝山株式会社、浅野工事株式会社からは協議以来一貫してご協力を頂いた事を記して感謝いたします。

平成4年3月

柏原市教育委員会
教育長 庖刀和秀

例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の平野・大泉古墳群（90-3次調査）における調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係北野 重を担当者として、
試掘調査 平成2年6月1日～平成2年6月14日
本調査 平成2年12月17日～平成3年3月31日まで実施した。また、古墳の実測を石田成年の協力を得た。
3. 調査に要した諸費用は、依頼者による負担である。
4. 調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加があった。

松井隆彦	藤田昌宏	空山 茂	山田顕章	安村俊史
石田成年	寺川 款	生駒美洋子	津田美智子	阪口文子
小西千賀子	頃安敏雄	尾野知永子	奥野 清	谷口鉄治
麻栄三郎	東野覚次	福田常治郎	福田宗一	乃一敏恵
有江マスマ	浅野工事株式会社		株式会社島田組	
5. 本書の執筆は、北野が行った。
6. 本書で使用した標高と方位は、特に注記のないかぎりT. P.、磁北である。
7. 本書で使用する平野・大泉古墳群は平尾山古墳群の平野・大泉支群である。
8. 本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライドを作成した。また、出土遺物は、写真、実測図と共に当教育委員会、歴史資料館にて保管、展示を行っている。広く利用されることを願うものである。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 平野・大県古墳群の概要	3
第1節 平野・大県古墳群の位置と環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査	6
第1節 調査の概要	6
第2節 遺構	7
第1項 第15支群9号墳	7
第2項 第15支群10号墳	8
第3項 第15支群11号墳	9
第4項 第27支群1号墳	9
第5項 第27支群2号墳	11
第6項 第27支群3号墳	11
第3節 出土遺物	12
第1項 土器	12
第2項 鉄釘	14
第3項 その他の遺物	15
第4章 まとめ	16
第1節 古墳の概要	16
第2節 木棺の復元	17
第3節 その他の遺物	18

挿図目次

図-1 周辺の遺跡	2
図-2 柏原市位置図	3
図-3 調査区位置図	6
図-4 第27支群1号墳	10

図-5	第15支群11号墳周溝出土遺物	13
図-6	第15支群11号墳出土鉄釘	14
図-7	第27支群1号墳出土鉄釘	14
図-8	金属製品	15
図-9	木棺の復元	18
図-10	かんざしの種類	18

図版目次

図版1	第15支群9号墳
図版2	第15支群9号墳
図版3	第15支群9号墳
図版4	第15支群10号墳
図版5	第15支群10号墳
図版6	第15支群11号墳
図版7	第15支群11号墳
図版8	第27支群1号墳
図版9	第27支群1号墳 天井部見通し・排水溝
図版10	第27支群2号墳
図版11	第27支群2号墳
図版12	第27支群2号墳
図版13	第27支群3号墳
図版14	第27支群3号墳
図版15	出土遺物
図版16	第15支群9号墳鉄釘
図版17	第15支群10号墳鉄釘
図版18	第27支群2号墳鉄釘
図版19	第27支群2号墳鉄釘
図版20	第27支具3号墳鉄釘
図版21	調査区全景
図版22	試掘調査(西側尾根)
図版23	試掘調査(第8トレンチ・第31トレンチ)

図版24	第15支群 9号墳	古墳全景 石室全景
図版25	第15支群 9号墳	人骨出土状況 鉄釘出土状況
図版26	第15支群10号墳	古墳全景 墓道
図版27	第15支群10号墳	検出状況 石室全景
図版28	第15支群10号墳	玄室の奥壁 石室から墓道を望む
図版29	第15支群10号墳	遺物出土状況 土器出土状況
図版30	第15支群11号墳	検出状況 床面検出状況
図版31	第15支群11号墳	石室全景 排水溝
図版32	第15支群11号墳	周溝内土器出土状況 西側から望む
図版33	第27支群 1号墳	調査前（南から） 調査前（北から）
図版34	第27支群 1号墳	古墳全景
図版35	第27支群 1号墳	石室床面 排水溝（玄室から）
図版36	第27支群 1号墳	東壁持送り部分 奥壁全景
図版37	第27支群 1号墳	排水溝検出状況 蓋石除去後
図版38	第27支群 2号墳	調査前（南から） 右室全景
図版39	第27支群 2号墳	遺物出土状況 土器出土状況
図版40	第27支群 2号墳	石室東側裏込め 石室西側裏込め
図版41	第27支群 3号墳	古墳全景 検出状況（北から）
図版42	第27支群 3号墳	石室全景
図版43	第27支群 3号墳	遺物出土状況 土器出土状況
図版44	移築した古墳	全景（南から） 全景（南東から）
図版45	出土遺物 その1	
図版46	出土遺物 その2	
図版47	出土遺物 その3	鉄釘 かんざし 耳環 玉類 鉄滓

第1章 調査に至る経過

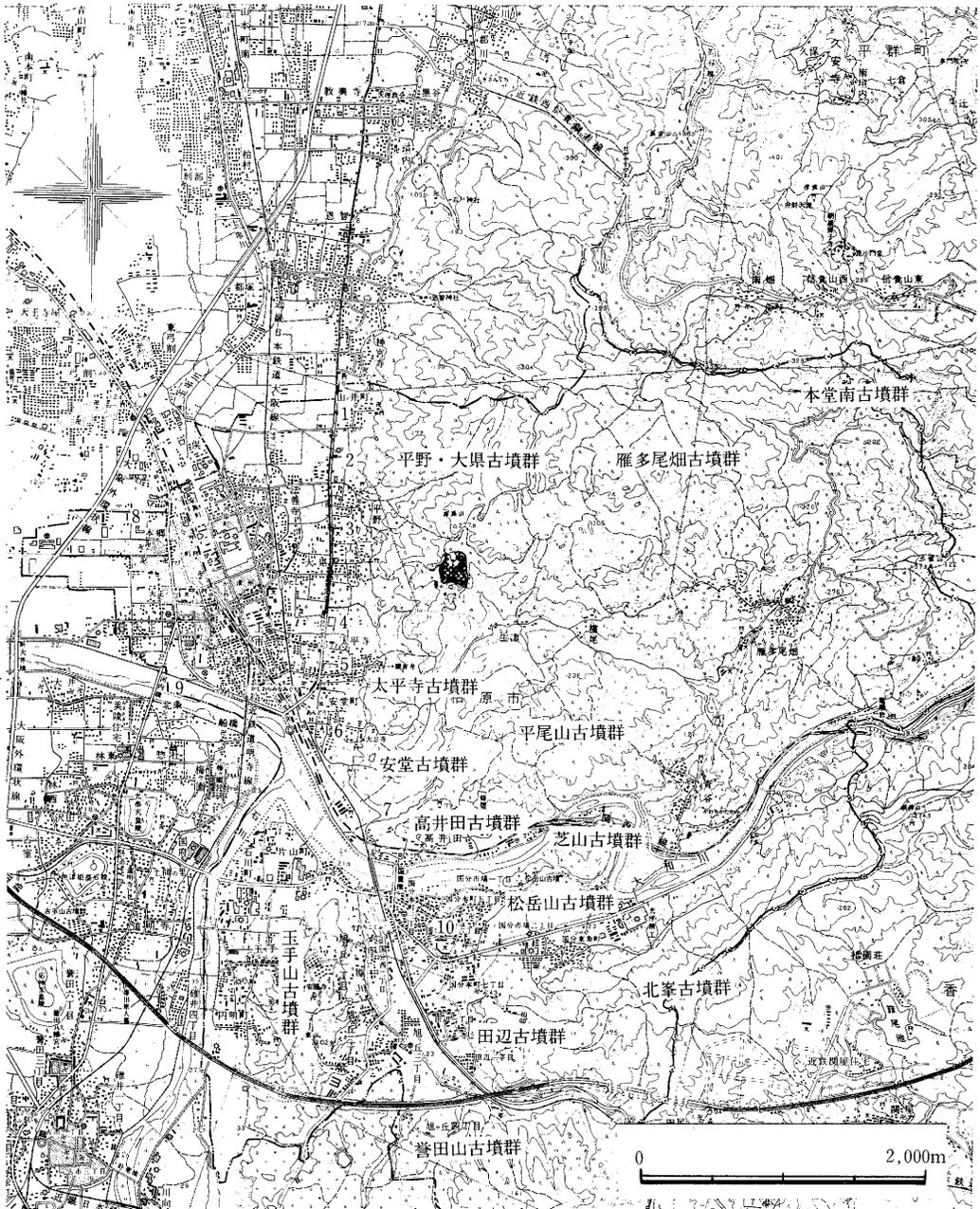
当該地における開発は、平野・大泉古墳群内にあたり申請面積（34,420㎡）が広大な事から事前の試掘調査を実施した。この当時は、開発許可が下りるという明確な状況になく、試掘調査が開発を促進する工事になっては文化財保護上良くないという姿勢により、砂防指定地内の土木工事の申請を提出しその許可を得た後および申請者と十分協議し文化財の保護を前提とする確認調査として実施する事になった。

試掘調査は、平成2年6月1日から6月14日まで実施した。重機により表土を掘削し、古墳等の確認は人力によった。当該地内の一部でぶどう栽培が続けられており、全域まで及ばなかった。対象地は、大きな谷筋を挟んで東西の尾根である。この両尾根の頂部と稜線上に37本のトレンチを設定した。その結果は、既に1基の古墳が確認されていたが、新たに4基を発見した。当該地内に多紐細文鏡の出土地（推定地）が含まれており、鏡出土の経緯をよくご存じの地元の方々や帝塚山短期大学の山本昭先生に色々ご教授を頂き、試掘トレンチを認定したが、その関連する遺構や遺物は確認されなかった。

本調査は、申請者との協議と大阪府教育委員会文化財保護課の指導により、平成2年12月17日から平成3年3月31日まで実施した。試掘調査によって確認した古墳と遺物の散布地周辺部を中心として、多紐細文鏡出土地周辺部を含め調査を実施し、計6基の古墳を全面発掘した。

調査を実施した古墳は1基が谷底部近くに存在するが、他の5基は尾根頂部又は稜線上に位置しているので開発計画が中止されないかぎり古墳の破壊が免れない。また、これらの古墳の多くは平野・大泉古墳群の中で初源期の古墳として位置付けられる事から事業者に対して2基の古墳の移築を要望した。この要望に対する事業者からの回答は、文化財に対する理解と費用負担についても快諾していただいた。移築する位置は、鐸比古鐸比売神社から高尾山高地性集落に連なるハイキングコース添いの地点に決定した。移築に関しては、富田林教育委員会中辻亘氏から色々なご教授をいただいた。移築は、当事業を担当する浅野工事株式会社から壺井石材㈱に依頼し、侵透性のある表土加工を実施し、一般市民の方に社会教育の一環として見学出来る場を提供出来るように実施した。

計画当初敷地内に既に確認されていた3基の古墳は、緑地の中に保存されている。



- | | |
|----------|----------|
| 1. 山ノ井遺跡 | 6. 安堂遺跡 |
| 2. 平野遺跡 | 7. 高井田遺跡 |
| 3. 大泉遺跡 | 8. 本郷遺跡 |
| 4. 大泉南遺跡 | 9. 船橋遺跡 |
| 5. 太平遺跡 | 10. 田辺遺跡 |

図-1 周辺の遺跡

第2章 平野・大県古墳群の概要

第1節 平野・大県古墳群の位置と環境

柏原市は、大阪府の南東部に位置し大阪府と奈良県の境に連なる生駒山地の麓にあたり、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63km、面積24.77km²、人口約76,000人の小都市である。

東側の奈良県と接する市町として、北側から三郷町、王寺町、香芝市があり、西側の大阪府の市は、八尾市、藤井寺市、羽曳野市が接している。

交通は、近鉄大阪線、JR関西本線の鉄道と国道25、165号線、西名阪自動車道の幹線道路がある。現代は交通の主流が鉄道よりも自動車道が重視されており、地域の発展及び活性化は道路整備に依るものと思われ、今後国道25号線のバイパスが検討されている。古くから交通の一端を担ってきた川は、市域を2分するように奈良県下の水を集めて生駒山地の南端亀ノ瀬狭谷を通過し大阪平野へ流れ出る大和川と南河内地方の水を集めて、北流する石川があり、重要な役割を古来より果たしてきた事が考えられる。その証拠として、玉手山古墳群の中に船の埴輪が出土しており、史跡高井田横穴の中に船の線刻壁画が見られる。

平野・大県古墳群は、市域のやや北側に位置し、生駒山地の南西端部の丘陵上に在る。広義の平尾山古墳群の北西部にあり、その中央に高尾山が聳えている。標高は、海拔30mから320mまでを測る。眼下平野部に山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡が南北方向に連続と連なっている。

平野・大県古墳群は、31支群130基の古墳を確認している。これらの古墳は、地形の上から3分類出来る。まず第1は、平野部と接する傾斜変換点付近に位置する古墳である。単独又は数基が群を成して造られている。第2は、丘陵斜面の比高差がある尾根筋上にある古墳で、割合連なって造られている。第3は、斜面を登りきった尾根頂上又はやや平坦な稜線上にある古墳である。基数が限られている。今回調査した古墳は、第3に分類される稜線上にあり、割合古い要素を持っている。地形上から分類した古墳の性格や時期がそれぞれ変遷されるかどうかは今後の調査の進展が不可避である。

平野部の集落遺跡に小河川が幾本もあり、恩智川へ注いでいるが、最も集落規模が大きい大県遺跡の谷山溪、宮山溪の上方の尾根筋に最も古墳が密集している。

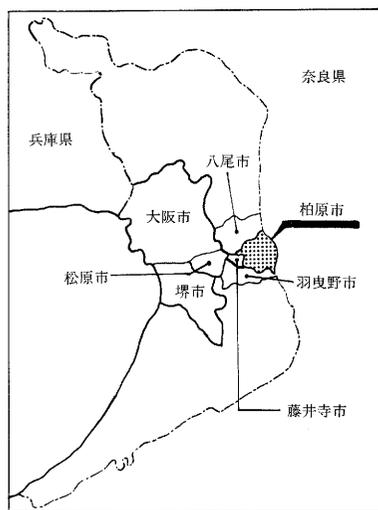


図-2 柏原市位置図

第2節 歴史的環境

平野・大泉古墳群は、柏原市平野、大泉に所在する古墳群である。周辺部には多くの古墳群が存在し大阪府下では最大規模を誇る地域である。生駒山地の南端部に南北3.5km、東西方向2.5kmの範囲に約1500基の古墳が造営されている。山麓部と接する尾根上に形成した古墳群は、平野古墳群、太平寺古墳群、安堂古墳群、高井田古墳群が在る。これらの古墳群の東側にあたる丘陵内部にも、雁多尾畑古墳群、本堂南古墳群、横尾古墳群（平尾山古墳群）が存在する。

これらの古墳群は、太平寺古墳群、安堂古墳群の一部に前期及び中期古墳が含まれているが、概ね古墳時代後期に属する群集墳である。どのような意図でこれらの古墳が集積し築造されたのかはあまり明確でないが、首長層だけにとどまらずや下位階級の人々が葬られ集団化したと考えられている。

古墳に被葬された人々がどの集落に住み生活したのかが判れば当時の社会構造や生活様式が復元される可能性がある。その方策として古墳の規模や形態から探る事や出土遺物の内容を検討して種類や時期から想定する事も可能かもしれない。もちろん柏原市域の古墳時代集落だけでこれらの古墳群が対応する事は当然考えられない。では、周辺部の大阪市、八尾市、松原市、藤井寺市、羽曳野市等の市域に存在する古墳時代集落が全部含まれるであろうか。墓誌等の明確な遺物が出土しないかぎり集落と古墳群を比定させるのは困難である。今後の調査によって出土する遺物に注目したい。以下、平野古墳群の西側に接する集落遺跡は概説したい。

1. 山ノ井遺跡

弥生時代中期、古墳時代、中世の遺構と遺物が出土している。旧国道170号線（東高野街道）から生駒山地西麓部の傾斜変換点までの緩斜面地で山ノ井川によって形成した扇状地上に広がる集落遺跡である。遺跡の東部に行基開祖と伝える瑠璃光寺と式内社若倭姫命神社がある。平野・大泉古墳群の2支群7基の古墳が東接している。さらに東側には5支群20基が存在する。

2. 平野遺跡

縄文時代から古墳時代にかけての遺跡である。大泉遺跡の扇状台地の北縁部にあたる。平野変電所から弥生時代の住居址、周溝墓が多数の弥生土器と共に検出され、古墳時代の土師器、須恵器が多数出土している。平野古墳群4支群9基の古墳が東接している。

3. 大泉遺跡

縄文時代から歴史時代までの複合集落遺跡である。立地は、谷山溪と宮山溪の扇状地を含む安定した扇状台地に位置している。縄文時代は、早期、前期、中期、後期、晩期の遺構と遺物が継続している。弥生時代は、壁穴住居、溝、ピット、土拵等の遺構を検出し、2万点以上のサヌカイト剥片や未製品が一括して排棄された土拵があり、石器製作が行なわれた痕跡も遺さ

れている。平野・大泉古墳群の中央部に聳える標高277 mの高尾山には高地性集落があり、その周辺から多紐細文鏡が出土している。古墳時代は、中期以降から鍛冶関連の遺構と遺物が集中して見られる。遺構は、鍛冶炉、金床台状遺構、溝、建物址等があり、鉄製品、鉄滓、鞆羽口、砥石、炭等の遺物が多量に出土する。幾内で最古最大の鍛冶専門集団の居住地である。飛鳥・白鳳時代は、平野廃寺（三宅寺）と大泉廃寺（大里寺）の古代寺院を擁している。平野廃寺は、現在遺構が検出されていないので平野遺跡に含まれる可能性もあるが、この周辺部から瓦片が出土する。大泉郡の郡衙は大里郷に置かれていたが現在まで明らかでなく、恩智川に近い現地表面からかなり深い所に眠っているかもしれない。式内社は、若倭彦命神社、鐸比古・鐸比売神社の3社がある。

当遺跡に東接する平野・大泉古墳群には14支群78基の古墳が存在しその大部分を占めている。当遺跡から出土する鍛冶関連の遺物が古墳の副葬品として添えられているか注目される。

4. 大泉南遺跡

旧石器時代から歴史時代までの複合遺跡である。立地は、岩崎谷から開けた扇状地上に位置する。旧石器時代の遺物として有舌尖頭器（サヌカイト）が出土している。古墳時代は、大泉遺跡とよく類似し、鍛冶関係の遺構と遺物が出土する。飛鳥・白鳳時代は、大泉南廃寺（山下寺）がある。主要伽藍はまだ未検出であるが、寺院縁辺部を確認している。平野・大泉古墳群の中の6支群25基の古墳が東接している。

5. 太平寺遺跡

河内6大寺の1つ智識寺を中心に据えた遺跡である。天冠山（標高227 m）の直下に袋地状の平地に拡がる。調査例が少ないが、飛鳥時代を中心として旧石器時代から歴史時代までの遺物が出土している。白鳳時代は、太平寺廃寺（智識寺）が遺跡の中心部に位置している。この寺院は、東大寺大仏が製作される起源となった云われる盧舎那仏が在り、現在主要伽藍の位置も確認されている。東塔の塔心礎が当寺東南隅に祭られている石神社境台に見られる。

平野・大泉古墳群は、当遺跡の北側で終り太平寺古墳群と接している。よって当遺跡は、太平寺古墳群と強い関係があると考えられる。

第 3 章 調 査

第 1 節 調査の概要

試掘調査は、平成2年6月1日から平成2年6月14日まで実施した。調査対象面積は、約34,000㎡である。現状は、東西に2つの尾根があり、南北方向に起伏しながら伸びている。当事業計画後に全域の小草等の伐採が行なわれた折分布調査した時良好な遺存状態の天井石だけが見える横穴式石室の古墳1基を確認した。古墳が存在する可能性のある位置に37本の試掘トレンチを設定した。掘削は、重機により慎重に掘り下げた後人力により精査した。調査の結果は、西尾根の稜線上に2基と山腹に1基の古墳を確認した。多紐細文鏡が出土したと考えられる場所は、弥生時代の祭祀関連遺構や遺物が検出される可能性があり、慎重を期した。しかし、後世のぶどう畑の開墾で削平されている模様であった。東尾根は、2基の古墳と2ヶ所の遺物散布地を確認した。

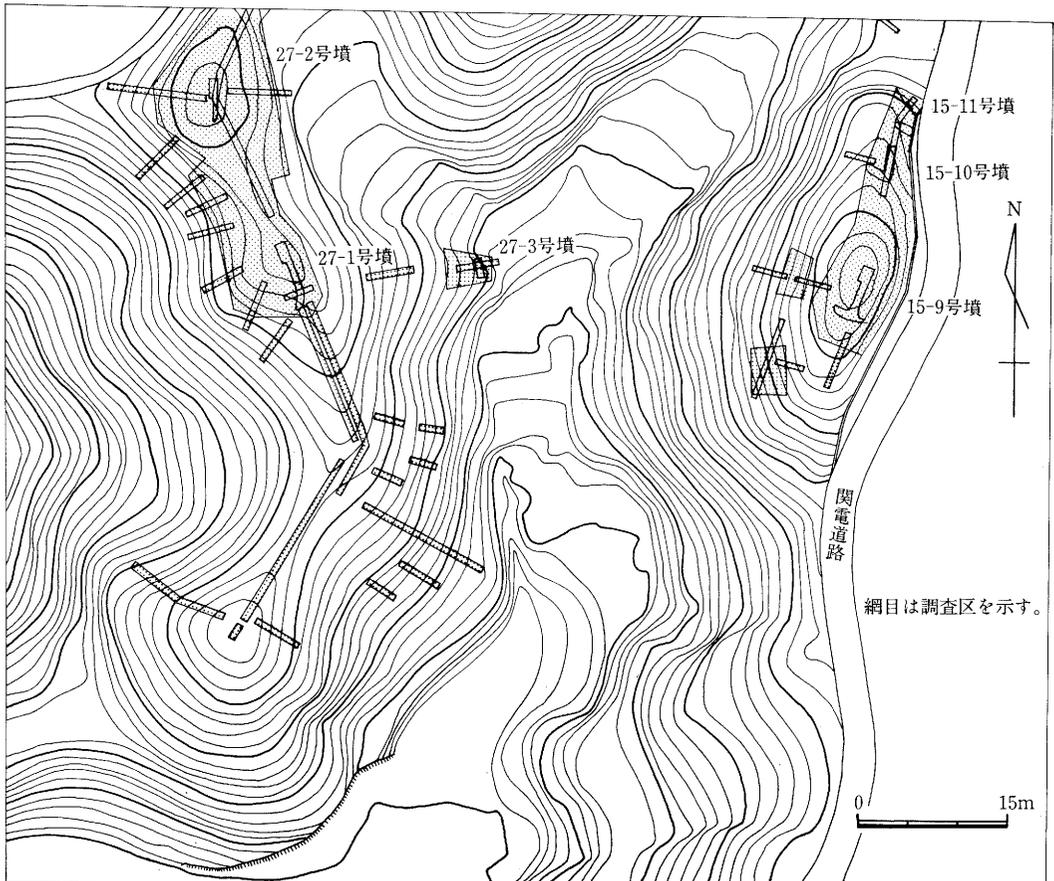


図-3 調査区位置図

本調査は、平成2年12月6日から平成3年3月31日まで46日間実施した。東尾根は、既存の古墳が南側尾根及び斜面上に8基の古墳が確認されている。当計画地内に3基の古墳が存在しており、平野古墳群第15支群6～8号墳である。これらの古墳は、現状保存する事になっている。新規に発見した3基の古墳は、南側から同支群9、10、11号墳と名称した。遺物の散布地となっていた場所は、尾根の西側斜面であるが、傾斜が険しいので恐らく8又は9号墳の石室内や墳丘上の祭祀遺物が畑開墾によって排棄された可能性がある。2ヶ所にトレンチを設定して調査を実施したが、遺物の包含する土層と畑の石垣を確認したのみである。9と11号墳は、道路開設時に部分的な削平を受けていた。11号墳は、石室の大部分が破壊されていた。

西側尾根は、1基の古墳が古くから確認されていたが、大阪府及び柏原市の遺跡地図及び地名表から除かれていた。今回新規の古墳として第27支群1号墳と名付けた。同墳は、天井石だけが露出して石室内はほとんど埋没しているので近世の盗掘は受けていない貴重な古墳と考えられた。1号墳の北側の尾根頂部の古墳を同支群2号墳とした。また、谷筋底部に近い古墳を同支群3号墳とした。

多紐細文鏡出土周辺部は出来る限り範囲を拡げ表土を剥いだ。結果は、須恵器の破片が1片出土したのみであった。斜面は急であり、畑開墾で旧表面よりかなり削平されている様である。高尾山高地性集落に近接している事から弥生土器等の出土が考えられたが、西尾根全体からも出土しなかった。

第2節 遺構

調査によって出土した遺構は、平野・大県古墳群第15支群9、10、11号墳と第27支群1、2、3号墳である。古墳以外についての遺構は検出されなかった。以下各古墳について墳丘形状、内部主体、遺物の出土状況について概説を加えていきたい。

第1項 第15支群9号墳

東側尾根の最頂部に位置し、本調査時に発見した古墳である。現状はぶどう畑の開墾と道路擁壁等によって墳丘が削平を受け石室の下段石が遺存するだけである。

内部主体は、右片袖式の横穴式石室である。玄室規模は、長さ3.3m、幅1.85～2.0m、袖部幅50cmである。奥壁は、石の抜き取りがあるが3石を基底石としている。右壁は、大小6石、左壁は、4又は5石を使用している。開口方向は、N-16°-Eである。石材は花崗岩の自然石を主として部分的に栗石を割石で補填している。

羨道は、長さ2.5m、幅1.1mを測る、墓道は、羨道より真直ぐ伸び約5mの所で直角に分岐する溝となっている。東側に折れる曲がる溝は、幅1mを測り次第に細くなっている。

西側溝は、幅約1.5mで3m程伸びたところで北側方向に屈曲している。

墓拡は、奥壁石により50～80cm、左壁石より60～80cm控えて掘削している。出土遺物は、後世の攪乱や盗掘によって持ち去られたと考えられる。床面から土師器細片、石製白玉、鉄釘が出土した。白玉は、1ヶは鉄釘の頭部に付着して、1ヶは、床面掘り下げ時に出土した。鉄釘は、木棺に使用したもので2棺分が出土した。北側部分にあるものは部分的に現位置を留めていた。木棺は、玄室の西側の第1棺と東側の第2棺がある。第1棺及び第2棺から歯、人骨と歯が検出された。木棺の規模は、鉄釘と人骨の位置から長さ約2m、幅0.5～0.65mである。羨道及び墓道の埋土から土師器細片が出土したが時期の明らかになる遺物はなかった。床面は、黄褐色粘質土を木棺の下層に敷いている。

墳形は、上部が削平されているので明確ではないが、長軸約15m、短径約12mの円墳と推測される。

第2項 第15支群10号墳

9号墳の在る東側根尾伝いに位置し、北側に約7m、比高差約4m下方に検出した。

内部主体は、無袖の横穴式石室である。玄室規模は、長さ3.3m、幅0.95～1.0mである。検出時に天井石と考えられる石は出土していないが、側壁の石が玄室内部に落ち込んだ状態であった。恐らく埋葬当時の状態ではないかと考えられる。床面から天井までの高さは遺存状態の良好な羨道部分から推定すると約1m位と考えられる。奥壁は、3石を基底石としている。右壁は、8石、左壁は、9石を使用している。開口方向は、N-10°-Eである。石材は、ほとんど花崗岩の自然石を使用し、少量の割石が見られる。当地周辺部から産出する石材である。羨道は明確でなく、奥壁より3.3mの位置に閉塞石が墓道にかけて長さ約1.5mで積まれていた。玄室内部の方は整然と積んでいるが、墓道側は次第に簡素で石も少なくしている。墓道は、南側へ約4m程直線的に伸び、西方向に直角に屈曲する。西側の方向へ約3.5m伸びているが、さらにそのまま2～3m直進した位置から急激な斜面となっている。9号墳と同様その端部は、北側に折れ曲がっているかもしれない。

墓拡は、奥壁石より55cm、左壁石より65cm控えて掘削している。

出土遺物は、ほぼ埋葬時のまま検出されたと考えられる。土器は、奥壁及び左壁隅に須恵器短頸壺(8)とその蓋(7)が正常位に置かれていた。また、その直ぐ南側20cmの位置に土師器甕(1、2、3、6)が方形に並列していた。他の遺物は、鉄釘、鉄滓がある。鉄釘は、木棺が自然に朽ち果てた状態で正立位のもの、横位のもの、到立位のものが多く出土した。復元した木棺の大きさは、長さ2.0m、幅0.55mである。据え置かれた位置は、石室の中心線より西側へずらして置かれた事が考えられる。墓道の埋土中から須恵器杯蓋(4)が出土しているが、墓道が割合深く埋没した頃で層位的に上層から中層の土層からである。

この古墳の被葬者は、一人だけの単葬である。

第3項 第15支群11号墳

10号墳より北側へ伸びた尾根伝いに少し下った位置で検出した。10号墳との床面比高差は、約2.7mを測る。検出した石室は、西側羨道及び玄室の一部壁を確認したのみである。東側壁及び奥壁は関電道路によって削平を受け道路のコンクリート擁壁の裏込め土砂が石室半分を埋めた状態であった。

内部主体は、片袖か両袖か不明の横穴式石室である。玄室規模は、長さ0.8m以上、幅1.5m以上である。羨道は、長さ2.3m以上、幅1.2m以上である。西側玄室壁及び羨道壁は、2～3段の石が遺存している。開口方向はN-48°-Wである。石材は当地周辺部で産する自然石の花崗岩である。羨道から玄室にかけて長さ2.5m、幅0.3～0.35m、深さ0.15～0.35mの排水溝を検出した。地山部分が羨道で高く玄室に低く下がり比高差0.35cmを測る。墓道は、ほとんど削平を受けていたが、南側に周溝の一部を検出した。周溝の位置は、少し湾曲し東西方向に伸びて羨道より約4m南側で検出した。規模は、長さ2.5m、幅2m、深さ0.5mである。

周溝の底部に細かく破砕した須恵器甕(22)が出土した。甕の上に25～35cm大の石を故意にのせた状態で出土している。甕の表面に朱によって描かれた模様が見られる。

出土遺物は、排水溝の埋土から須恵器高杯(8)と鉄釘6本が出土している。複次埋葬における追葬時にそれ以前に埋葬されていた副葬品や遺骨等を整理し、不要になった遺物を廃棄したものであろう。玄室内と考えられる土層から土師器甕(9)が1点出土している。

第4項 第27支群1号墳

第27支群は、今回の調査によって命名した支群である。1号墳は、既に確認されていた古墳であるが、分布調査における図化した折に欠落していた。

第15支群の西側に谷を1つ隔てた南北方向の尾根筋上にあり、天井石が1石露頭してそのわずかな狭間から石室内部が覗き込めた。周辺部は、後世の畑開墾時に大きく削平や盛土が行なわれており、旧地形を想定するのは困難な状況を呈していた。

内部主体は、右片袖式の横穴式石室である。玄室規模は、長さ3.69m、幅1.86～1.68m、高さ2.64～2.22m、右袖幅0.63mである。羨道部は、天井石が取り去られており明確でないが両側壁の遺存状態から長さ約3.5m、幅1.23～1.03m、高さ約1.4mである。墓道は、羨道より約3m程真直ぐ伸び西側へ逆くの字に屈曲している。約9mまで確認し、端部は山の斜面に自然消滅している。羨道中央部に石組みの排水溝を検出した。玄室と羨道の境から南へ約1m南側から約4m続いている。構造は、両側に立石を設置しその上に蓋石をのせている。立石は、15～50cm長の扁平な石を使用し長いほうを横位にして両側12石並べている。

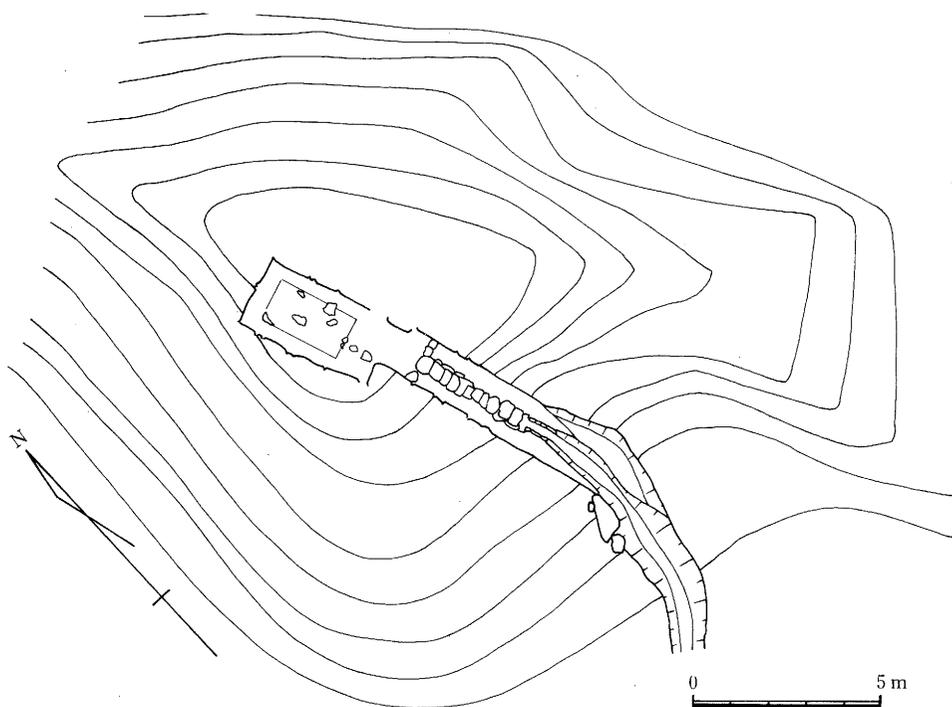


図-4 第27支群1号墳

基本的には1石だけであるが部分的に2段積み及び栗石をかまして蓋石の安定をはかっている。内法及び深さは約20cmである。蓋石は、長さ3.2mで10石使用し、立石の南端で約80cmの部分で蓋石が認められなかった。排水溝はさらに南へ地山を掘り下げ続いている。玄室寄りの蓋石の左右両側に石を並べている。玄室（一部羨道を含む）と区画する意図があるのであろう。この石より北側には長さ約1m、幅20cm、深さ（排水溝底部より）30cmの掘り込みがある。排水溝の底部と玄室で検出した床面がほぼ同一レベルであり石室内がある程度没した後で造られたことが考えられる。玄室内は黄褐色粘土を約5cm敷きその上に厚さ3cmの炭を全面に入れている。埋葬施設は凝灰岩製の石棺があったと考えられる。その根拠として凝灰岩の破片（20～40cm大）が少量散乱しており、石棺を設置していたと考えられる位置が少し下がっていた。大きさは、長さ225cm、横幅120cmである。石室の構築は、割合大きな石を使用している。奥壁は、基底石は2石を使用し、4段積みで最上段1石で一番大きな石を使用し、持ち送りは上部ほど大きい。玄室東壁は、基底石4石で5段積みしている。全体に下方の石が大きい。西壁の袖石と対応する石は、横位であるが高さもあり意識して置かれている。持ち送りは、下方はほぼ垂直であるが上方は傾斜を持たせている。西壁は、基底石4石で5段積みである。東壁と同様上方の石が小さくなっている。持ち送りは少なく垂直に近い。羨道部は、袖石部2段積みで他は

3段積みである。

天井石は、玄室部に3石遺存し羨道部は見当らない。後世に持ち去られたのだろう。出土遺物は、玄室中央部の床面から石棺の破片に混じり瓦器片が出土した。また、右袖部付近と玄室から排水溝までの間で鉄釘12本が攪乱した状態で出土した。また、排水溝の西側石の下層から釵子と考えられる破片が出土した。恐らく追葬時に初葬の副葬品等を整理排棄されたものと考えられる。

第5項 第27支群2号墳

1号墳の位置する尾根を北へ約15m離れた尾根頂部に1号墳より約1m高い位置に存在している。試掘調査において発見した古墳で石室の基底石だけしか遺存していない後世の破壊が激しい古墳である。

内部主体は、右片袖式の横穴式石室である。墳丘は、後世に削平されほとんど見当たらないが直径10mを越えると考えられる。開口方向は、N-12°-Eである。玄室規模は、長さ3.65m、幅1.8~2.1m、右袖幅0.65mである。羨道部は、基底石だけで明確でないが、長さ2.2m、幅1.0~1.1mである。墓道は、羨道から真直ぐ伸び約4.5m続いている。

石室の構築は、基底石だけが遺存している。奥壁3石、玄室東壁6石、西壁6石、羨道両壁各3石である。石材は、大きい石でも1mの長さを越えるものはなく、周辺部が採石される花崗岩である。割石の使用が少ない。また、石材の質も悪く軟質のものが多。

石室の床面は、後世の石材の抜き取りや攪乱によって埋葬時の状況は部分的な復元しか出来ない。埋葬は、3回が考えられ、玄室西側(第1棺)と同東側(第2棺)及び玄室南側から羨道部(第3棺)に木棺の痕跡があった。第1棺は、北側小口部の釘が良好に遺存していた。第2、3棺は大部分の釘が移動したと考えられるが、部分的に遺存している釘もあった。また、それぞれの棺の下層に黄褐色粘土又は黄灰色粘質土が敷かれていた。

出土遺物は、第1棺の奥に須恵器の杯蓋(14)、杯身(12、15)、短頸壺(13)が供献され土師器甕(11)が第1棺と東壁の間に裏向けて置かれていた。耳環は、第1棺から2ケ(126、127)、第3棺から1ケ(128)が出土した。その他に玄室内及び羨道内の埋土から土師器と須恵器の細片が出土したが、時期が明らかになるものは出土しなかった。

第6項 第27支群3号墳

西側尾根の東側斜面下方で谷底部に近い位置で検出した古墳である。試掘調査で検出したもので石室内に多数の石が崩れ落ち天井石と考えられる石も附近に見られた。石室内は、後世の攪乱もなく未盗掘の古墳である。

内部主体は、無袖の横穴式石室である。いわゆる堅穴系小石室である。墳丘はほとんど削平

されていたが、大尾根筋から東側へ伸びたわずかな起伏の稜線中央部に築かれている。開口方向は、ほぼ磁北に近くN-3°-Wである。石室規模は、長さ3.06m、幅1.02~1.32m、高さは0.75m以上である。墓拡の大きさは、南北方向には石材間際で掘られ、東西方向には0.4~0.5m控えて掘られている。

石室の構築は、最大のもので約50cm位までの割石を使用し、天井石は存在しなかったが、3段を基本として積上げていると考えられる。基底石は、奥壁3石、東壁7石、西壁7石である。南側小口には、床面レベルで石はなく、やや高い位置に積上げられている。石の大きさが不整いであり、積み方も雑である。西壁は持ち送りがあるが、東壁は直立気味である。

石室の床面は、埋葬当時の状況そのままと考えられ、土圧によって遺物が若干移動している位である。木棺の痕跡を示す鉄釘も横位のもの、立っているものが認められた。鉄釘は、総数24本である。供献した遺物は、木棺の中央部付近の東壁との間に須恵器杯蓋身2セット(16~19)と蓋付短頸壺(20、21)がかためられて置かれていた。

第3節 出土遺物

各古墳から出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦器の土器類、鉄釘、鉄鋸、金銅製釵子、銀製耳環、鉄滓の金属製品、水晶切子玉、ガラス製小玉の玉類がある。それぞれについて時期又は形状のわかる遺物について概略したい。

第1項 土器

第15支群10号墳から出土した土器類は、土師器甕(1~4)と須恵器杯蓋(5)、蓋付短頸壺(6、7)がある。

土師器甕(1~3)は、口径8.75~9.3cm、器高5.25~6.1cmを測る広口の小型甕である。口縁部は、短かく外反し端部は尖がり気味に終る。内外面の調整は、板ナデを主に使用し、外底面にヘラ削りを行う。胎土は、密な粘土を使用し、白色微砂粒、雲母、くさり礫を含んでいる。色調は、明赤褐色である。土師器甕(4)は、口径11.95cm、器高10.3cmの中型甕である。口縁部は、短く直立気味に外反し、端部は内面の方に角が付く。内外面にハケ目がよく遺存しているが、口縁部外面と体部内面上半部が指ナデによるスリ消しがある。胎土と色調は、1~3の甕と同様である。

須恵器杯蓋(5)は、陶邑編年II-4段階の時期で墓道上層埋土から出土したものである。蓋付短頸壺(6、7)は、陶邑編年II-1段階である。6は、口縁外面端部の2ヶ所に朱による印がある。7は、外面をカキ目調整と擬格子叩きがある。

第15支群11号墳の石室埋土から土師器甕(9)と須恵器高杯(8)が出土した。9は、口縁

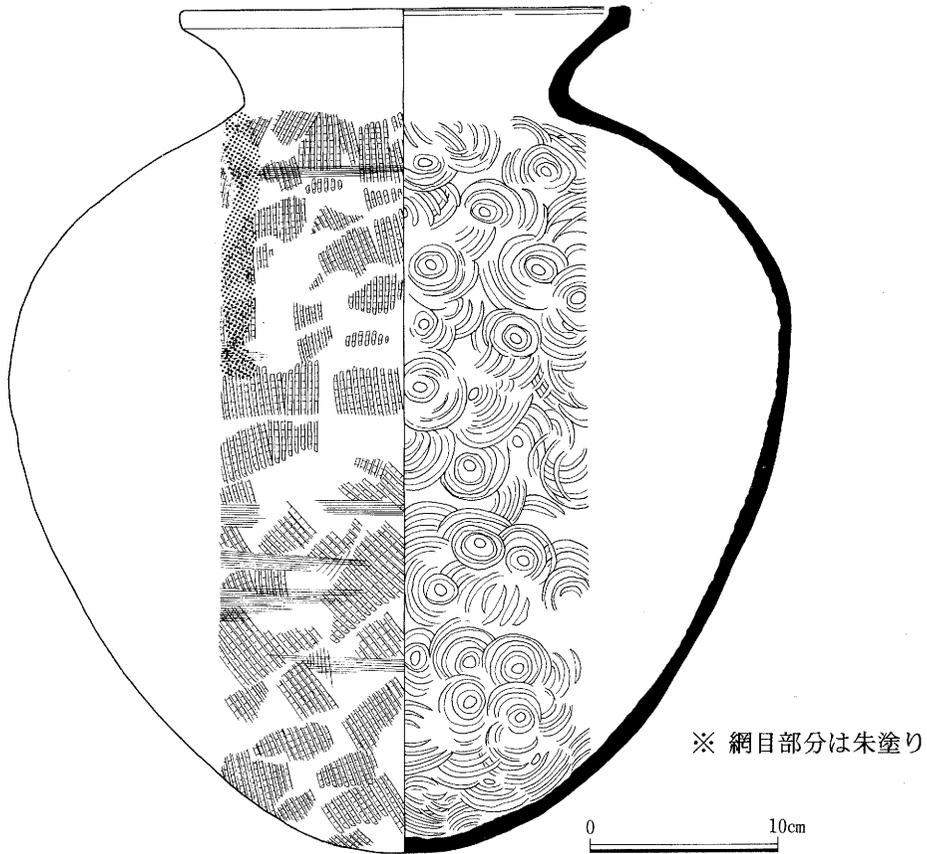


図-5 第15支群11号墳周溝出土遺物

部が小さく外反して尖がり気味である。底部は安定のいい平底部分がある。8は、陶邑編年II-4段階である。杯部の口縁部内側にわずかな凹線があり、底部にレのヘラ記号がある。

第27支群1号墳から瓦器碗(10)が出土した。玄室に安置されていた石棺が持ち去られた時の遺物であろう。高台は小さいが外面にやや密なヘラミガキが施こされており、12世紀後半の時期である。

第27支群2号墳から土師器甕(11)と須恵器杯蓋身(12、14、15)と短頸壺(13)が出土した。11は、口縁部は小さく外反して端部が尖がり気味に終る。外面底部はヘラ削りを施こす。

12~15は、陶邑編年II-2、3段階で14と15の蓋身セットが古式である。14の蓋天井中央部に朱による印がある。6と同様に供献時に祭祀的な意味を持つものであろう。

第27支群3号墳から須恵器杯蓋身2セット(16~19)と蓋付短頸壺(20、21)が出土した。16~19は、陶邑編年II-2段階で、20と21は、II-3段階である。20の外面に形骸化した稜と21の口縁部内側にわずかな凹線がのこる。21の底部に一のヘラ記号がある。

第2項 鉄釘

鉄釘は、木棺を製作する時に板材を接合させる時に使用されたものである。鉄釘が錆る時木棺の枯朽した木目が付着している時がある。木棺は、蓋板と底板各1枚と、長側板と短側板（小口板）各2枚によって造られるのが通常であるが、弥生時代の墓に見られる組合せ式の木棺や刳貫式の木棺もある。今回の調査では前者しか見られない。各古墳毎に出土した鉄釘と鏝を報告する。釘の各部の名称は、頭を頭部、頭部のある上の方を上部、打ち込む先端の方を下部として呼称したい。釘には必ず2つの板材の木目が存在するから4通りの分類が可能がある。

A類……………上部の木目が釘と直行し、下部も同じく直行するもの。

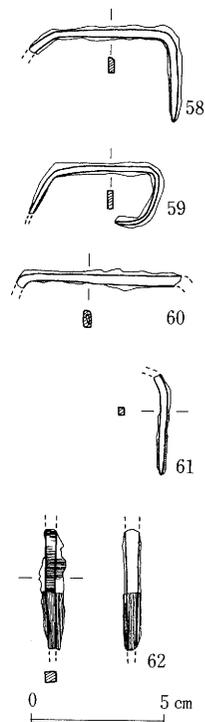
B類……………A類と同様だが上下部の木目90°方向が違うもの。

C類……………上部の木目が直行し、下部の木目が平行するもの。

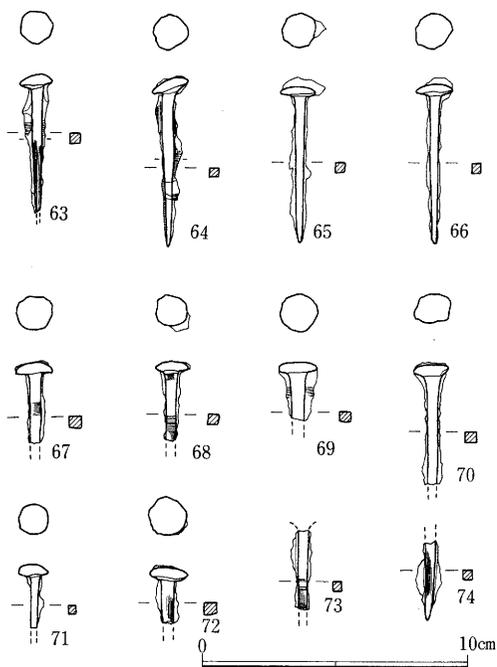
D類……………上下部の木目とも釘と平行するもの。

各古墳から検出した木棺は、第15支群9号墳から3棺、10号墳1棺、11号墳1棺、第27支群1号墳1棺、2号墳3棺、3号墳1棺であった。

第15支群9号墳から出土した鉄釘は、玄室西側の第1号棺からA類5本、B類1本、C類7本を確認した。1号棺の完形の鉄釘の大きさは、長さ17.1～18.9cm、平均18.0cm、重さ56.4～72.2g、平均65.3gである。



図一六 第15支群
11号墳出土鉄釘



図一七 第27支群1号墳出土鉄釘

2号棺は、A類1本、C類2本である。長さ16.9～19.1cm、平均18.3cm、重さ74.7～105.8g、平均88.2gである。

この他に全長のわからない折損した鉄釘が6本出土した。完形の釘に復元した場合には1号又は2号棺の平均的長さや重さと大きく変わるものはない。

釘の断面形は、方形のものが全部を占める。幅又は厚さは、1号棺、0.65～1.4cm、2号棺で0.8～1.3cmを測る。木目から板材の厚さがわかるのはC類で、4.8～6.2cm、平均5.5cmである。

10号墳は単葬であり1棺分の鉄釘が30本出土した。A類が10本、B類1本、C類7本で他のものは不明であった。完形の鉄釘

の長さは、10.1～15.9cm、平均13.3cm。重さは、15.4～55.4g、平均33.0gである。釘の断面形は方形で幅又は厚さは、0.5～1.05cmである。板厚は、5.2～6.0cmを測る。

第27支群1号墳の羨道部から12本の鉄釘が出土した。完形のもの平均長さ5.9cm、重さは4.8gである。割合木目が付着していないので不明なものが多い。

第27支群2号墳は、3棺分の鉄釘が出土した。1号棺は、完形のもので長さ18.7～21.3cm、平均20.0cm、重さ74.5～122.8g、平均99.9gである。A類1本、B類1本、C類7本である。2号棺は、完形のものではなく1号棺釘より若干小さいと考えられるが、折損したもので20cm以上のものもある。この棺は底板に鏝が打たれていた。背部に布目痕があり、死装束の跡であろう。また、鏝刃外部に縦木目痕が見られるのは、打込む時に隙間が生じ目地に木を打ち込んだ痕跡か。A類3本、C類2本がある。3号棺は、C類のみ9本が出土した。大きさは、1、2号棺よりわずかに小さい。板厚は、5.1～8.7cmを測る。

3号墳は、27本が出土し、A類8本、B類3本、C類10本である。完形の鉄釘は、長さ14.3～18.8cm、平均15.6cm、重さ37.7～60.3g、平均49.5gである。断面方形で0.7～1.55cmの幅と厚さがある。板厚は、3.5～6.8cmまで確認した。B類が6.2～6.8cmと大きくC類が3.6～5.2cmである。

第3項 その他の遺物

被葬者に副葬された遺物としてかんざし、耳環、玉類がある。供献遺物として鉄滓がある。かんざしは、長さ6.6cm、径3mmの銅芯で金メッキを施している。一端が折損している。耳環は、3個体出土した。径1.7～1.9cm、芯径2mmである。銀製で漆が塗られている。

玉類は、第15支群9号墳よりめのう色ガラス玉1ヶ、第27支群1号墳から水晶製切子玉1ヶコバルトブルーのガラス玉1ヶ、不明の玉2ヶが出土した。

第27支群2号墳からコバルトブルー、レモン色、めのう色ガラス玉が5ヶ出土した。

第15支群10号墳より鉄滓が2点出土した。大きさは4.2×3.9cm、重さ47.4g、2.4×2.0cm、重さ5.3gのものである。柏原市内鉄滓が出土した古墳は、田辺古墳群1号墳、太平寺古墳群第4支群4号墳、同第3支群2号墳、安堂古墳群第7支群2号墳平野・大泉古墳群第15支群10号墳と6例目である。

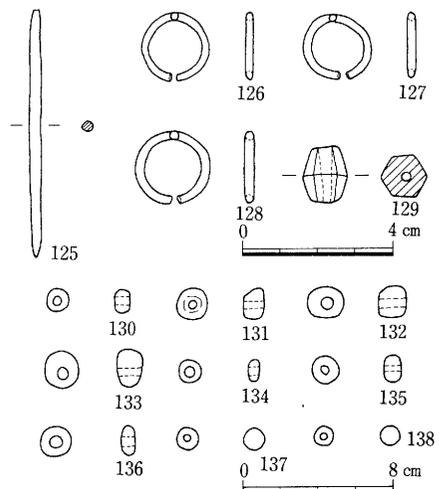


図-8 金属製品

第4章 ま と め

今回の調査は、平尾山古墳群に含まれる平野・大泉支群の古墳の調査である。位置は、高尾山（標高277m）の南側稜線上にある。当支群における古墳の調査は、これまで1基を数えるだけで開口している古墳の実測が数基行われているのが実状である。よって、その実態がほとんどわからない古墳群と云える。

柏原市域の東北部に広がる生駒山地の南端丘陵上は、割合低位の丘陵で古墳を築造するための可能な要素が幾つかある。巨大古墳の多い古市古墳群からあまり距離が離れていないので歩行で半日とかからない。また、横穴式石室に使用される石材は、当丘陵の主形成岩である花崗岩が豊富である。近畿地方最大級の群集墳で約1500基が確認されているが、周辺平野部に数多くの集落遺跡が古墳の数に十分に見合うだけ確認されている。

古墳の調査から平野・大泉支群の分析を若干述べてみたい。

第1節 古墳の概要

今回調査を実施した古墳の内3基は、時期を明らかにする遺物が出土していない。よって遺存している石室の構築方法から時期を比定せざるをえない。

まず、第27支群1号墳の石室から考察したい。この石室は、右片袖式で当古墳群内に主流の形態である。玄室は当初から設計が存在したと考えられ、玄室の長さとは幅は2：1であり、奥壁基底石2石と両側壁基底石4石を数える。玄室の奥壁及び両側壁は5段積みで奥壁の上部に大きな石を使用し、側壁は下部の方が大きな石である。袖石は、2段積みと考えられ、東壁の袖石に対応する石も意識して大きい石である。羨道部は、2、3、4石積みである。玄室と羨道の取り付けは、少し屈曲して接合し、羨道の石積みが途切れる付近の墓道がさらに屈曲している。

羨道の天井石は遺失しているが、玄室天井石は3石を数える。使用された石材は、当地周辺部から採石する花崗岩を主体としている。中には軟質なものが多く割れが目立っている。また、石の積み方も整然としていなく雑な部分が随所に見られる。持ち送りは、西壁が直立気味で、東壁及び奥壁が羨道の側石高まで直立し、それより上部は大きな傾斜を持っている。

玄室の埋葬は、石棺（凝灰岩）を使用したと考えられるが、恐らく12世紀頃に持ち去られている。最下層に黄褐色粘土を敷き、その上に炭を前面に被せてある。石棺が置かれた位置は、玄室の中央部にあたりその重みで2～3cm土層が下がっていた。敷石の例は多くあるが、炭を敷くのは少ない。太平寺古墳群第4支群4号墳に鉄滓が混入した炭を敷いた例がある。炭は邪気を払う祭祀的な意味を持つのか湿気抜きか明確でない。羨道部に2石の立石の上に蓋石をの

せた排水溝が取り付けられている。そして付け加えるところの排水溝の裏込めの中から及びその周辺土層から木棺に使用された鉄釘や副葬品とみられるかんざしの一部が出土している。これは、石棺の埋葬時に排水溝が作られ、それ以前にも埋葬があった事が知れる。

この石室に類似した石室は、山畑古墳群22号墳、切戸古墳群1号墳、藤ノ木古墳等があげられる。それぞれ周辺部の古墳の中で盟主的な存在の古墳で割合地位の高い人物が葬られていたと考えられる。

第15支群9号墳及び第27支群2号墳は、それぞれ尾根筋の最も高所の稜線上に位置し、各支群の中で優位な場所と云える。石室の構築は、自然石又は割石を使用し、右片袖式である。玄室の長さとの比率（幅÷長さ）は、0.56、0.49でほぼ1：2の範中である。基底石は、奥壁に3石を置き、第15支群9号墳の玄室東壁のみ4又は5石であるが、同墳西壁及び第15支群9号墳の両壁は6石で玄室の長さとの整数比とはほぼ一致する。羨道部は、2.5m、2.2mの長さで約1.1m幅である。

このような石室の類例は少ないが、一須賀古墳群I6号墳、天理市ホリノヲ5号墳、桜井市長瀬藪1号墳前方部石室、新庄町笛吹古墳群第23号墳、寺口忍海古墳群E-12号墳等がある。畿内の横穴式石室の導入期より少し下がった時期であり、平尾山古墳群内では古式の横穴式石室である。高井田山古墳とは立地や副葬品の相違があり、次形式の石室である。陶邑II-1、2段階に属する。

第15支群10号墳は、9号墳を意識して構築した小型の横穴式石室である。時期もあまり差がないだろう。第27支群3号墳は、谷筋部に近い山麓部に位置する堅穴系小石室である。これまで確認している小石室は、尾根筋に近い場所に多く造られており、独立した古墳は少なく今回の検出例は特異である。

各古墳の時期変遷は、次の通りである。

第15支群 9号墳——10号墳——11号墳

第27支群 2号墳——1号墳——3号墳

第2節 木棺の復元

各古墳の埋葬方法は、第27支群1号墳の石棺以外は木棺を使用している。それぞれ木棺を組合せ接合した鉄釘が出土した。木棺には、鉄釘を使用しない組合式の木棺や削り抜き式木棺がある。木棺は、普通天井板1枚、側板2枚、小口板2枚、底板1枚を組合わせている。太平寺古墳群第3支群8号墳から出土した木棺を復元したことがある。その時2通りの木棺の形態があり、小口板と側板が方形のままのものと柄穴を作り組み合せた形態である。今回の検出した木棺は全部前者に含まれると考えられる。また、板材の厚さは、鉄釘に遺存している木目の方

向からよくわかる。C類の鉄釘は、木目が明瞭に変化するので、頭部からこの木目が変わる点までが板材の厚さに匹敵する。木棺が一番厚い板材を使用しているのは、第27支群2号墳で8～9cmを測る。次に第15支群9号墳、10号墳、第27支群3号墳の5～6cm厚さである。また、第15支群11号墳、第27支群1号墳出土鉄釘は、長さが6cm程しかなく板材も薄いものを使用したと考えられる。

鉄釘の大きさは、板材の厚さに比例すると考えられ、第27支群2号墳のもので長さ20.0cm、重さ約100g平均である。第15支群9号墳のもので18.3cm、88.2gと18.0cm、65.3gを測る。第27支群3号墳は15.6cm、49.5g。第15支群10号墳は、13.3cm、33gである。

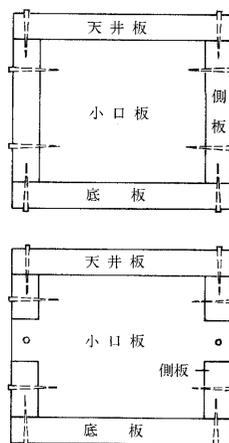


図-9 木棺の復元

第3節 その他の遺物

調査結果から明らかなように第15支群10号墳と第27支群3号墳は埋葬当時の状況をそのまま遺存している。他の古墳は、石の抜き取りや盗掘によって復元する事は困難である。出土遺物の中で注目すべき事柄を取り上げて簡単にまとめたい。

第15支群10号墳から供献鉄滓が出土した。大県遺跡や大県南遺跡から沢山の遺構や遺物が検出されているが、古墳からその関連する遺物はあまり多くなかったが、近年古墳の調査件数が増加するにつれて徐々に発見されるようになった。古墳時代中期から後期にかけて鍛冶専門工人在古墳に埋葬された人物とどのような関係を持つものか注目される。

第27支群1号墳の排水溝裏込め土層からかんざしが出土した。鉄滓と同様にその出土例は少なく、府下で一須賀古墳群と柏原市内の古墳群に限られている。戦闘的な武器類である刀や鉾、鉄鏃等が極単に少なく、このような装飾的な遺物が見られる事は、埋葬された人物の生活環境が垣間見られる。今後古墳群の性格が問われる時期が来れば、被葬者が文人的あるいは貴族的な性格がさらに強まるものと考えられる。

第15支群10号墳の須恵器短頸壺蓋、同支群11号墳周溝から出土した甕、第27支群2号墳杯蓋の一部に記号あるいは印として朱が塗られていた。何らかの意味を持つと考えられるが今後の出土例を待ちたい。

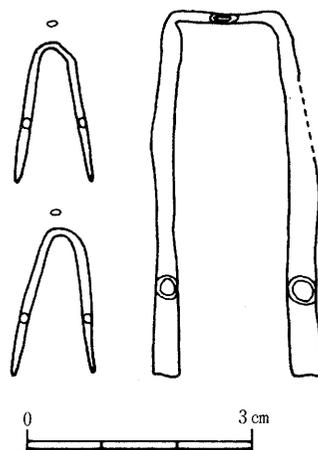
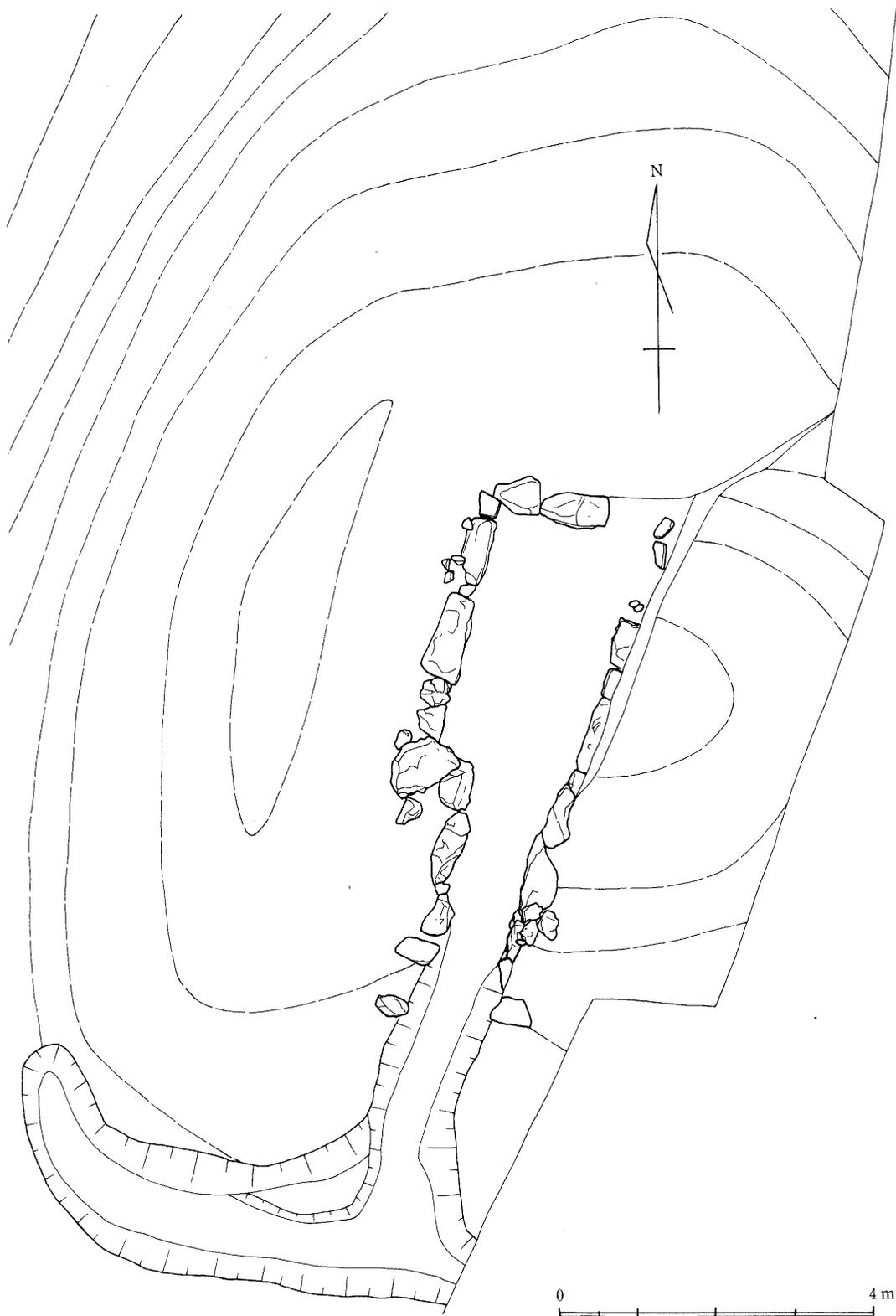


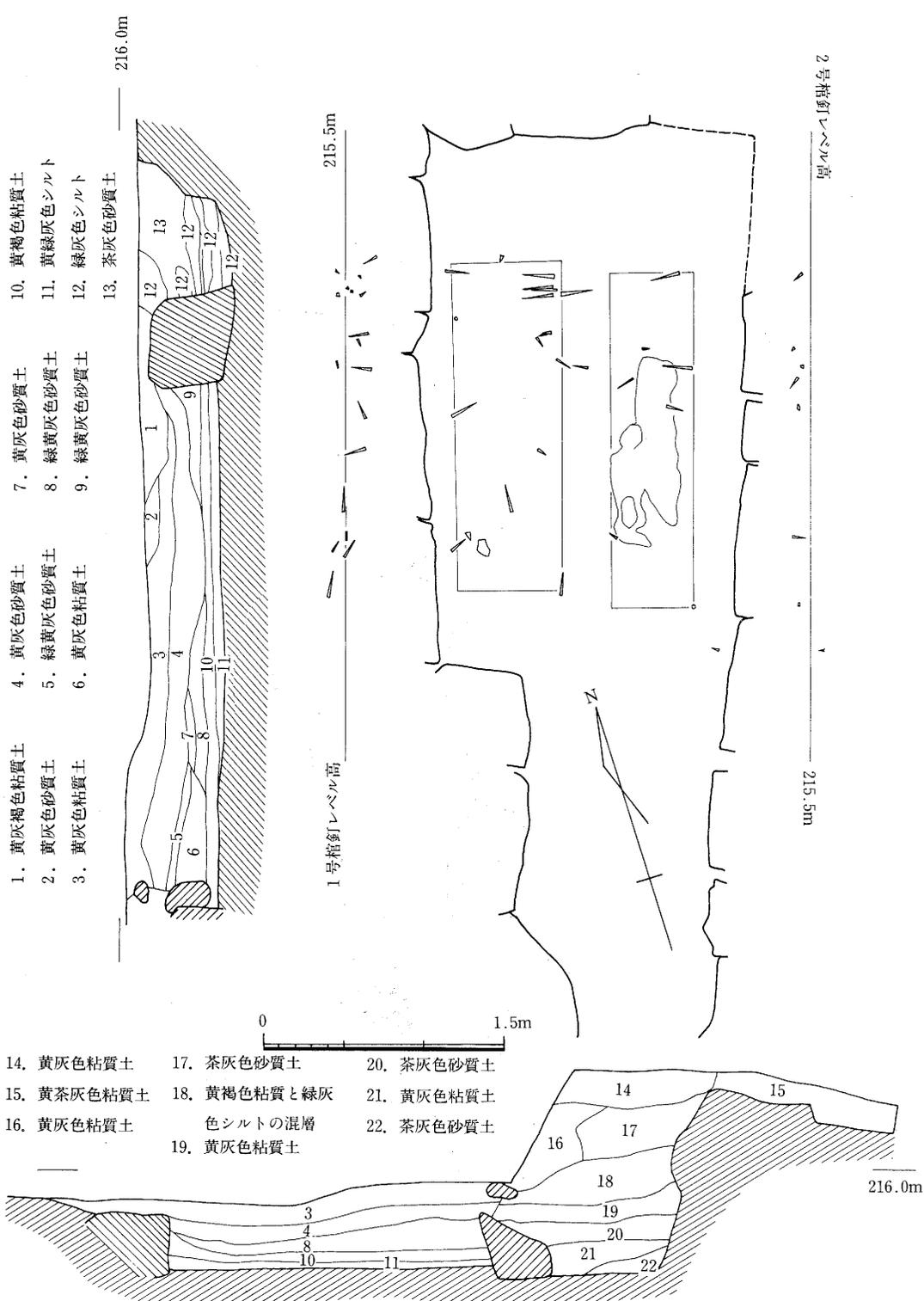
図-10 かんざしの種類

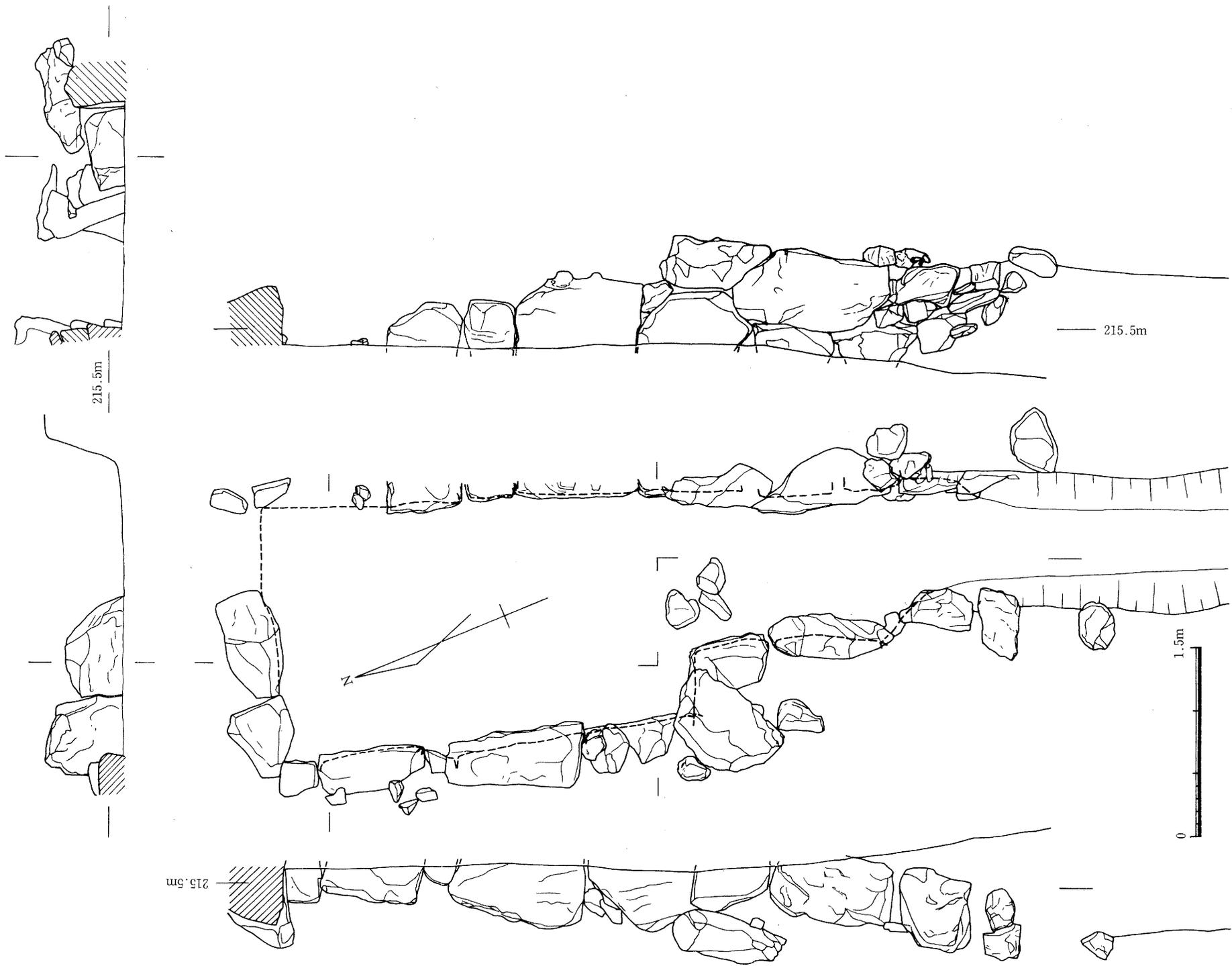
版 圖

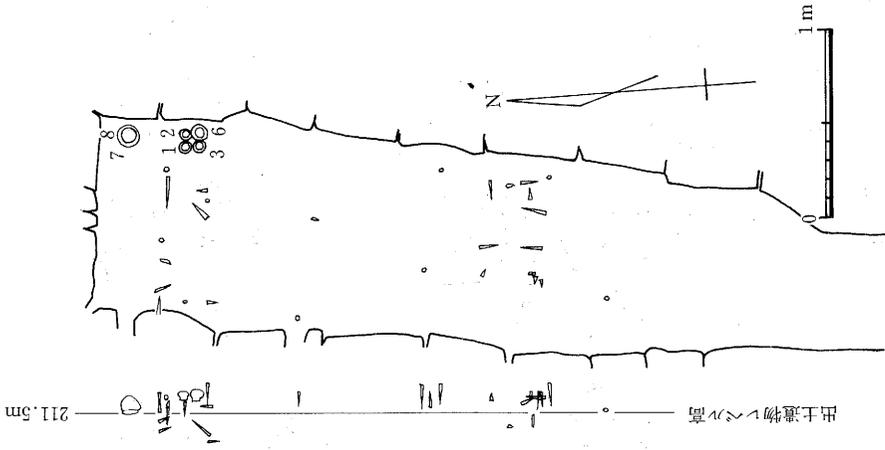
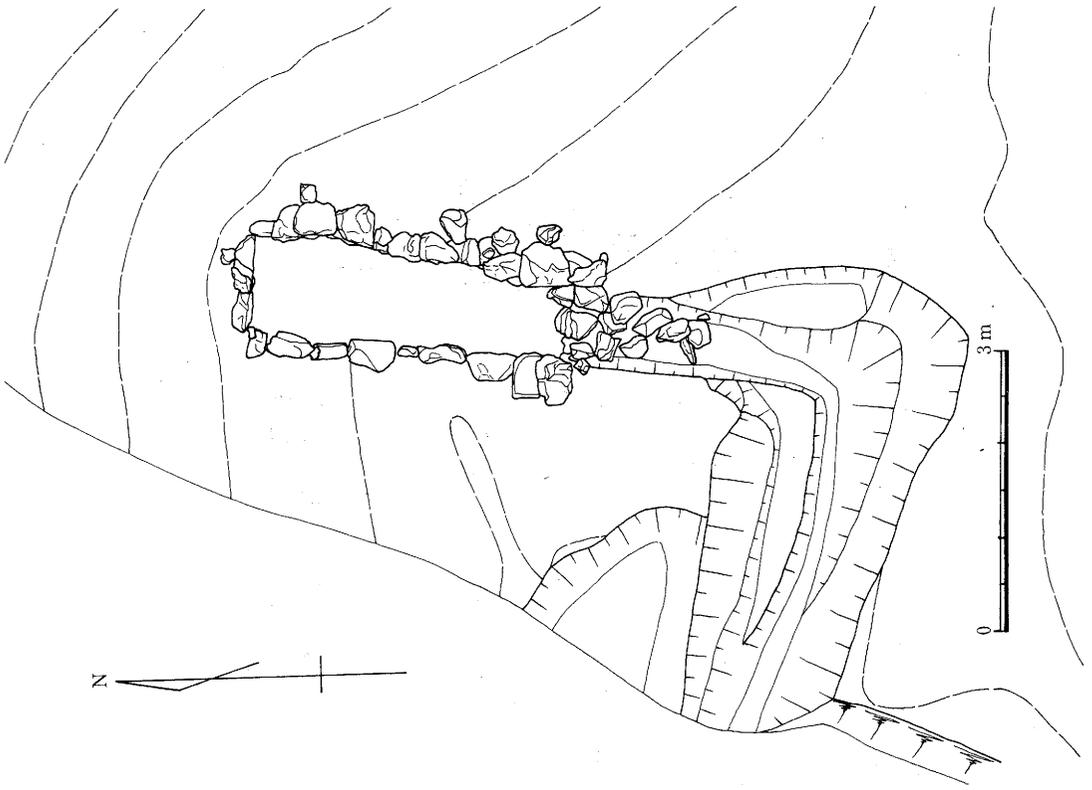




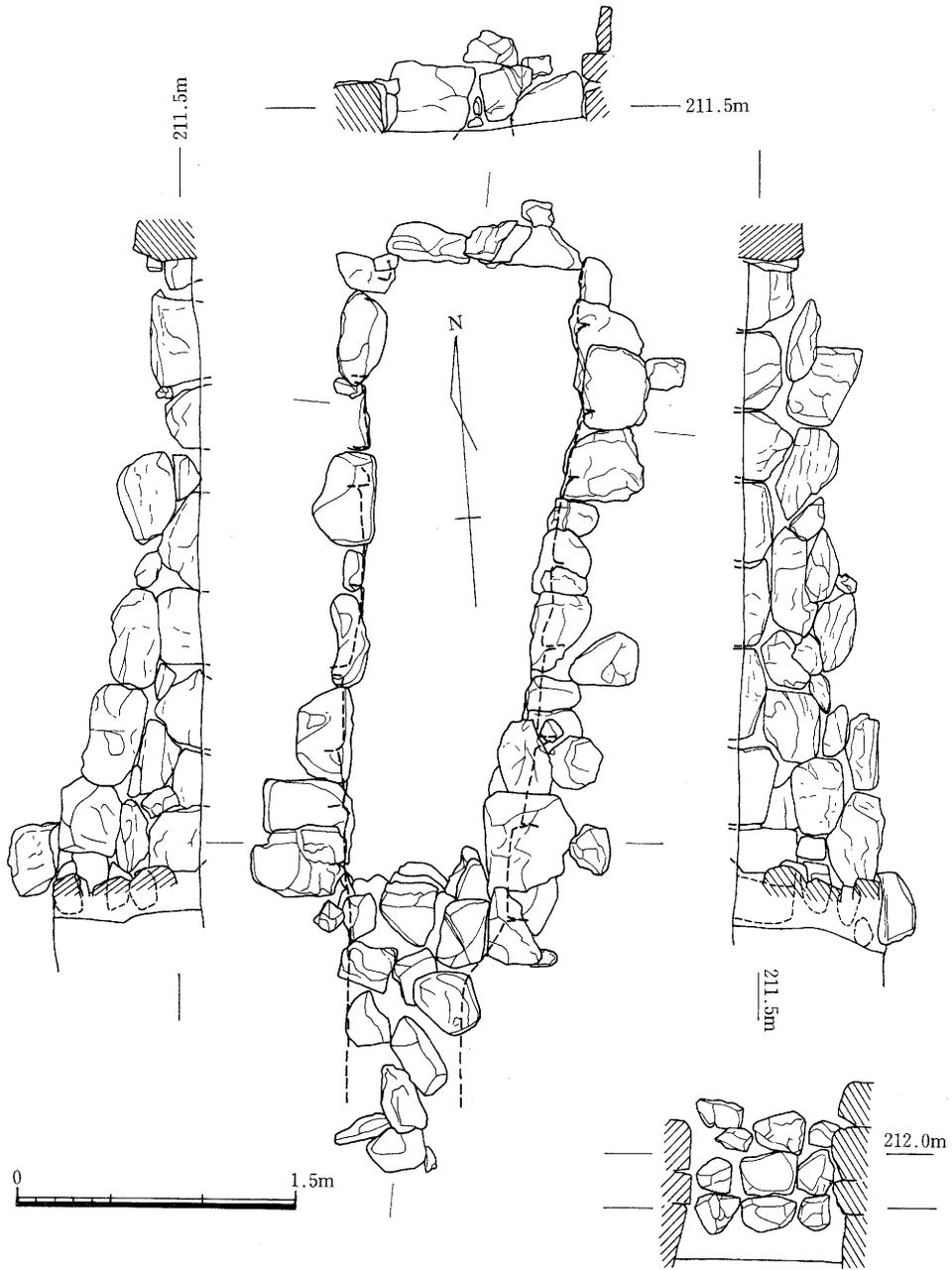
図版二 第15支群9号墳

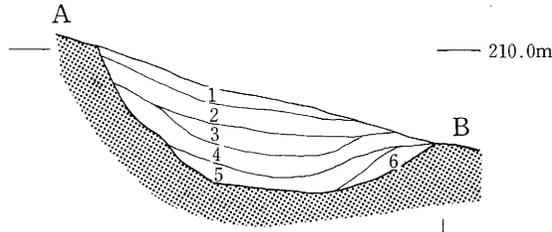
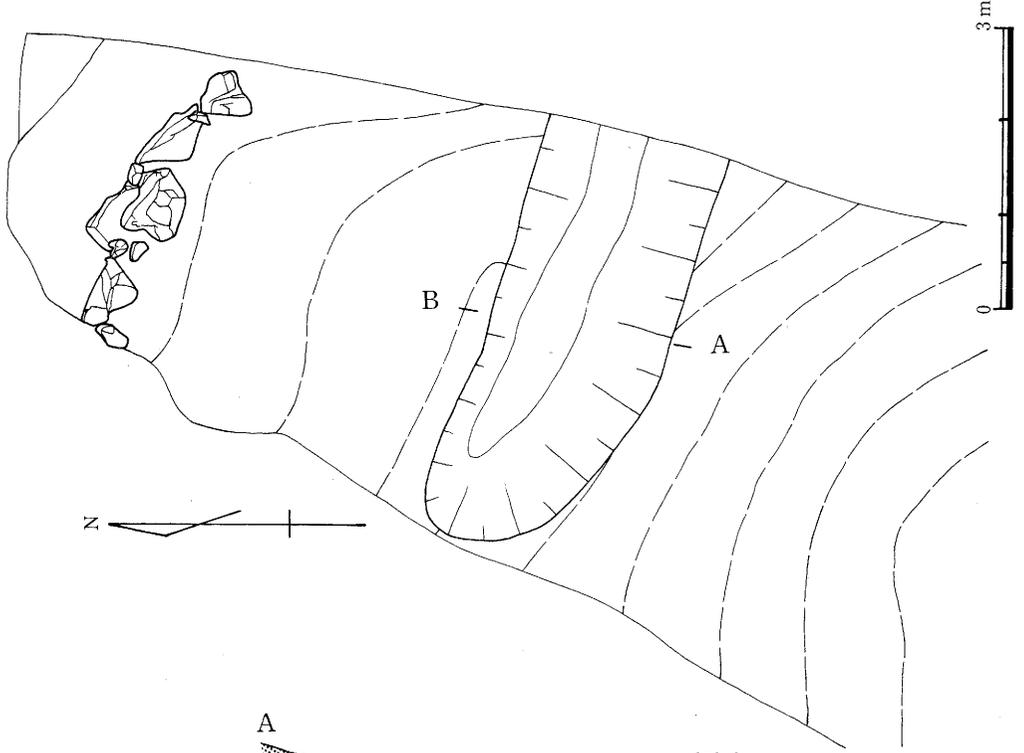




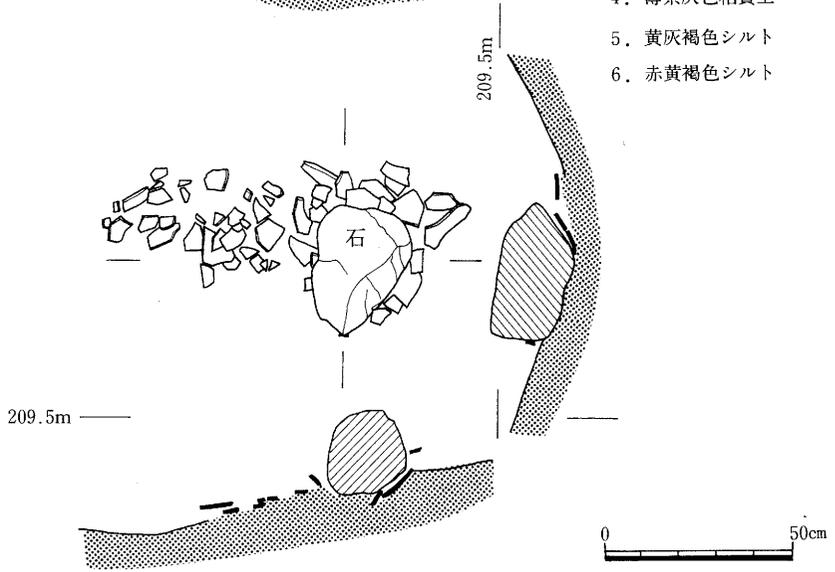


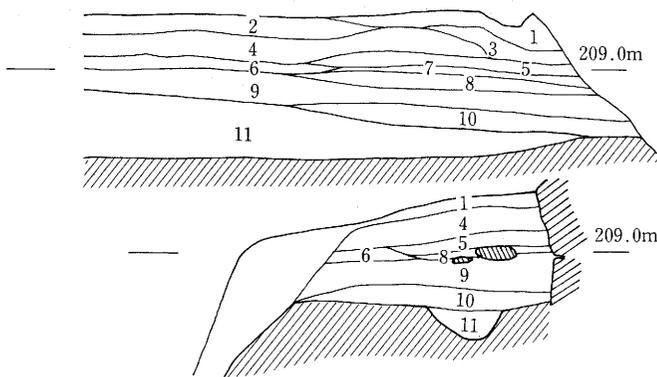
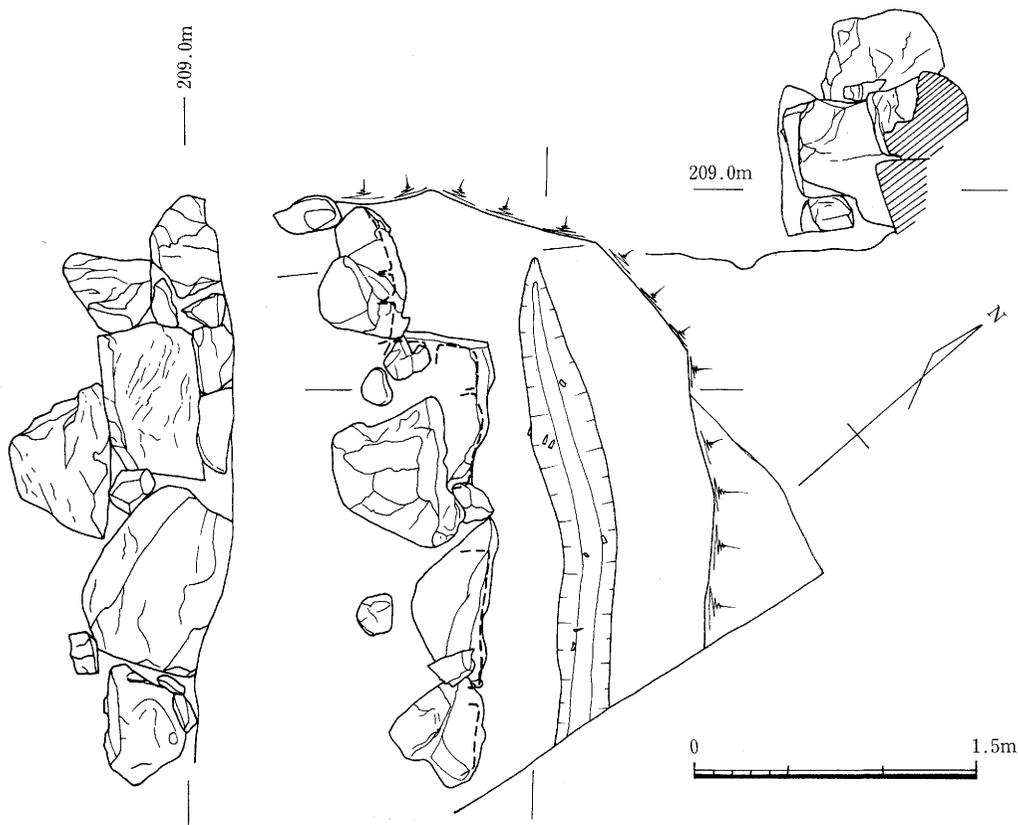
图版五 第15支群10号墳



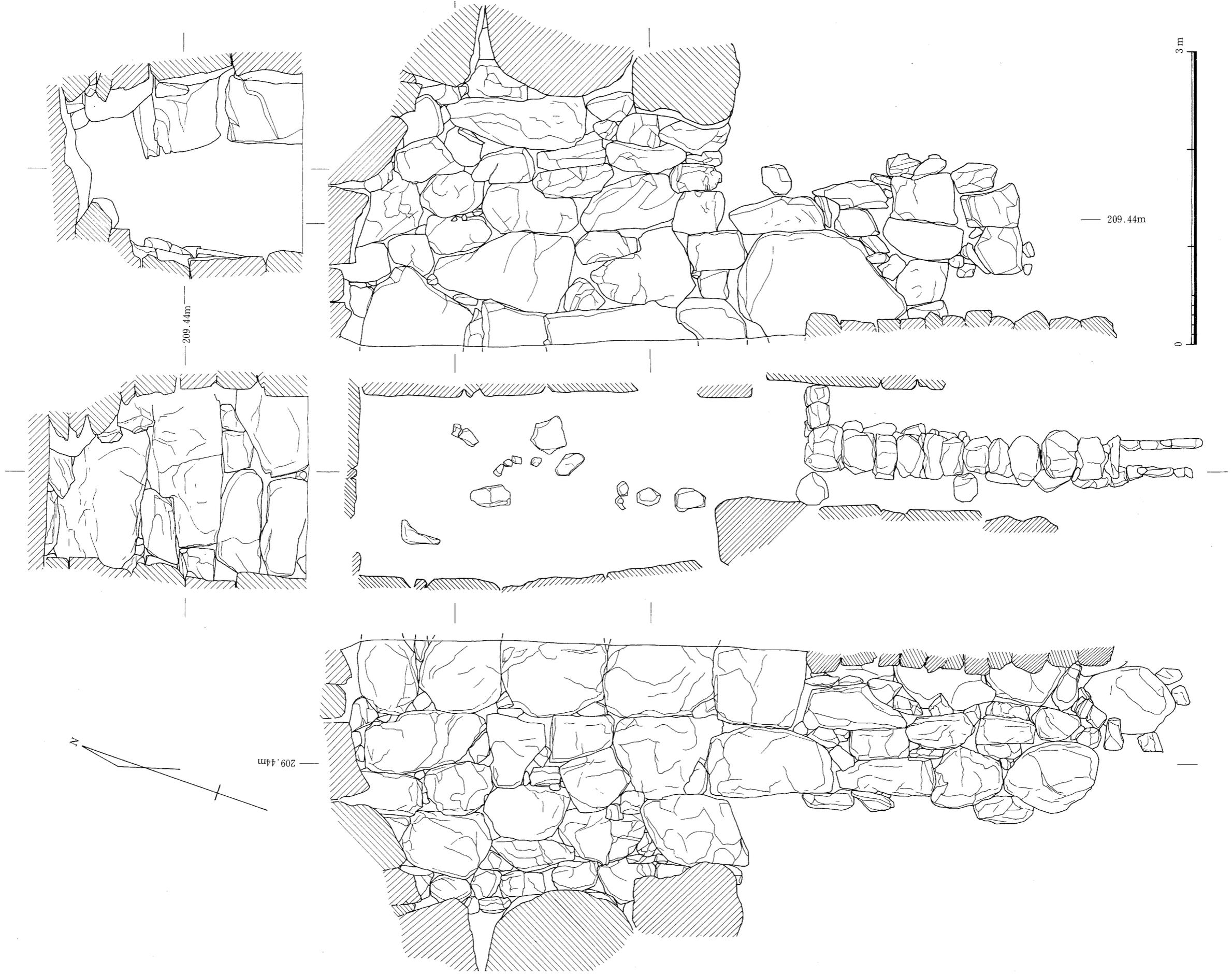


1. 黄灰色粘質土
2. 薄茶黒灰色粘質土
3. 黒茶灰色粘質土
4. 薄茶灰色粘質土
5. 黄灰褐色シルト
6. 赤黄褐色シルト





1. 黄茶色粘質土
2. 黄茶灰色砂質土
3. 灰黄色砂土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 灰黄黑色粘質土
6. 灰褐色粘質土
7. 黄褐色粘土
8. 黄褐色粘土
9. 黄褐色粘質土
10. 黄緑灰色粘質土
11. 黄灰色砂質土



3 m

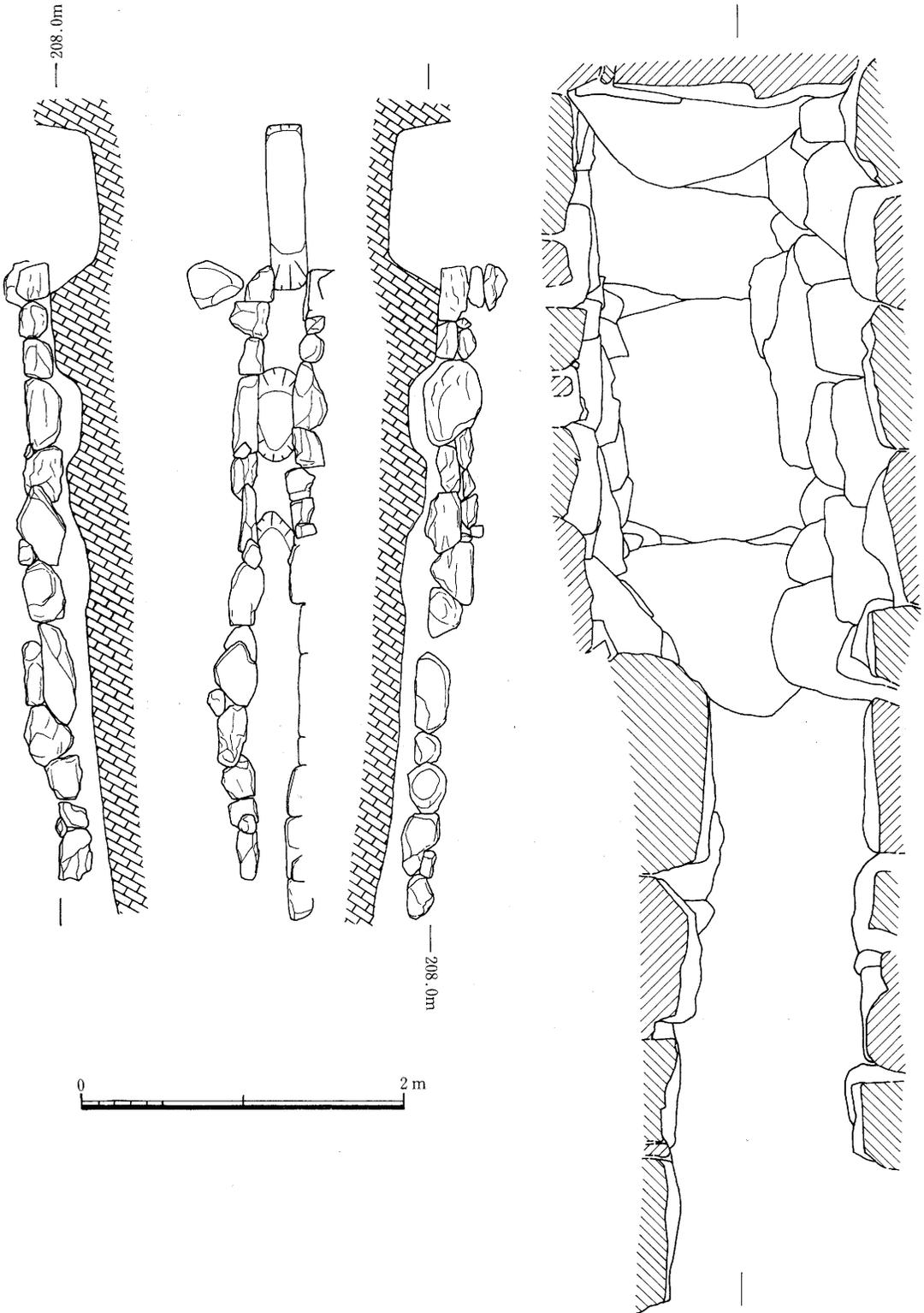
— 209.44m

209.44m

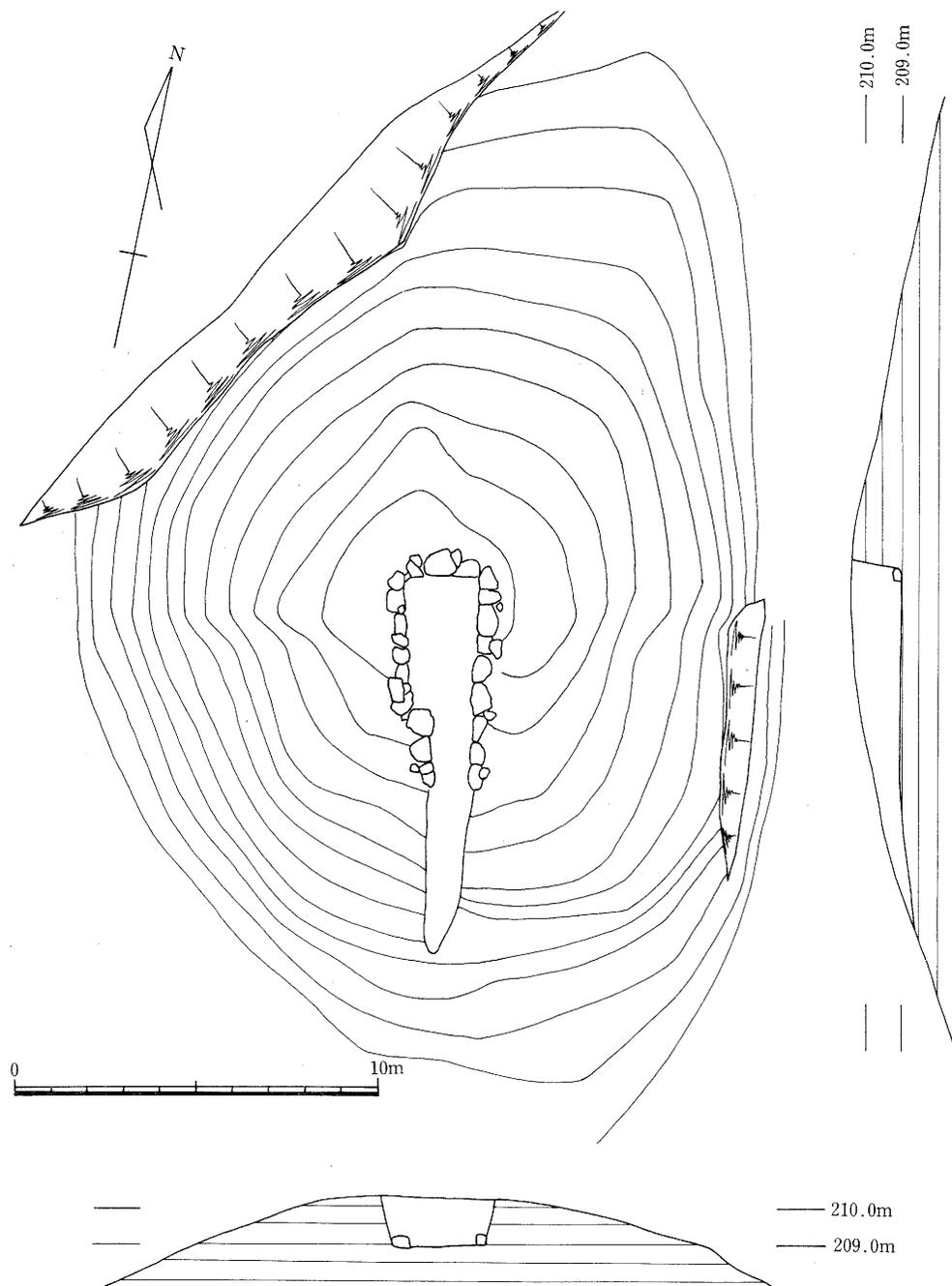
209.44m

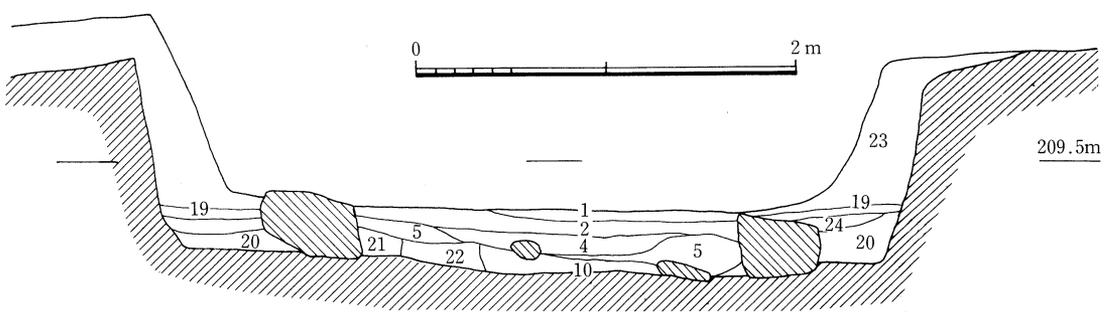
N

図版九 第27支群1号墳天井部見透し・排水溝



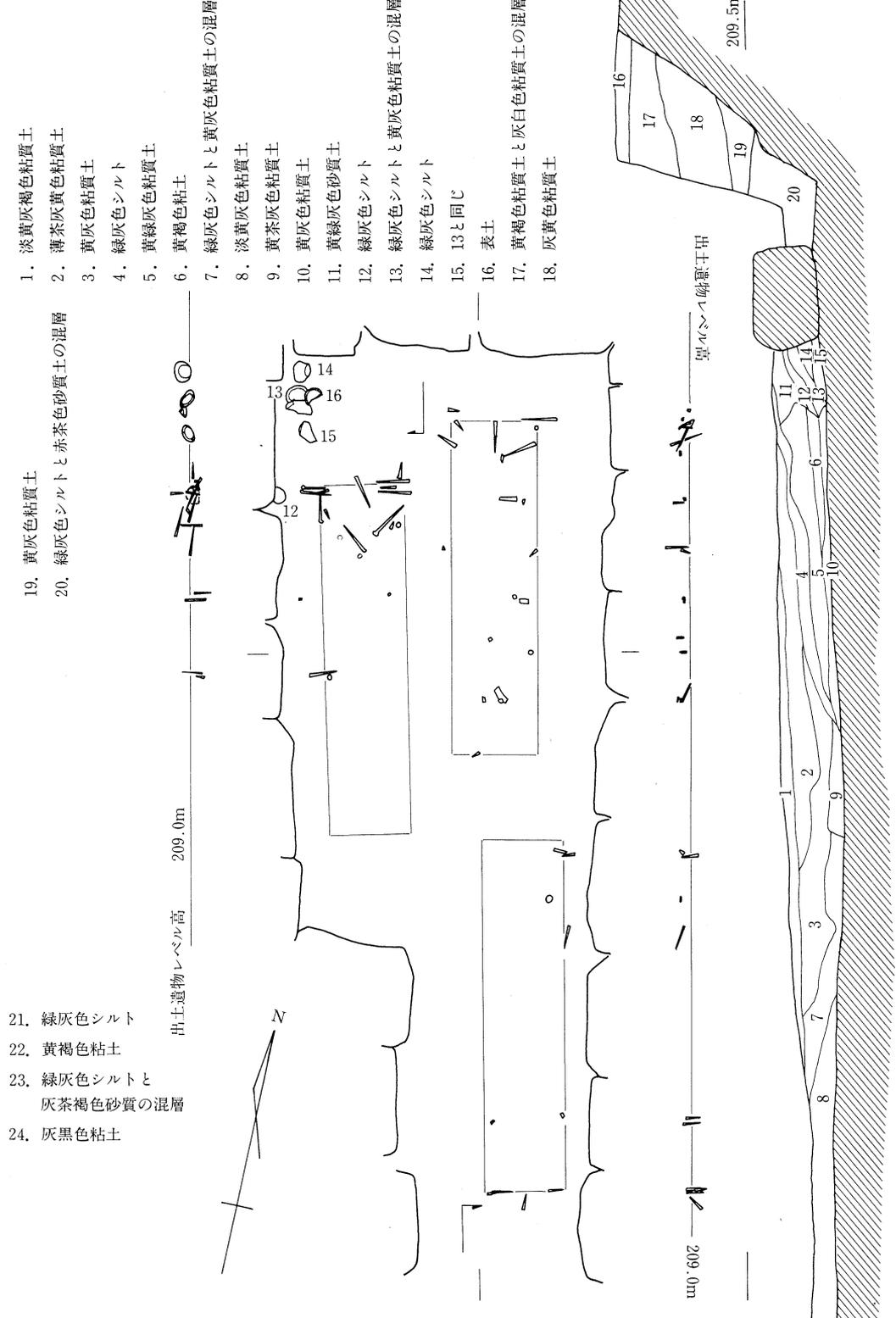
图版十 第27支群2号墳



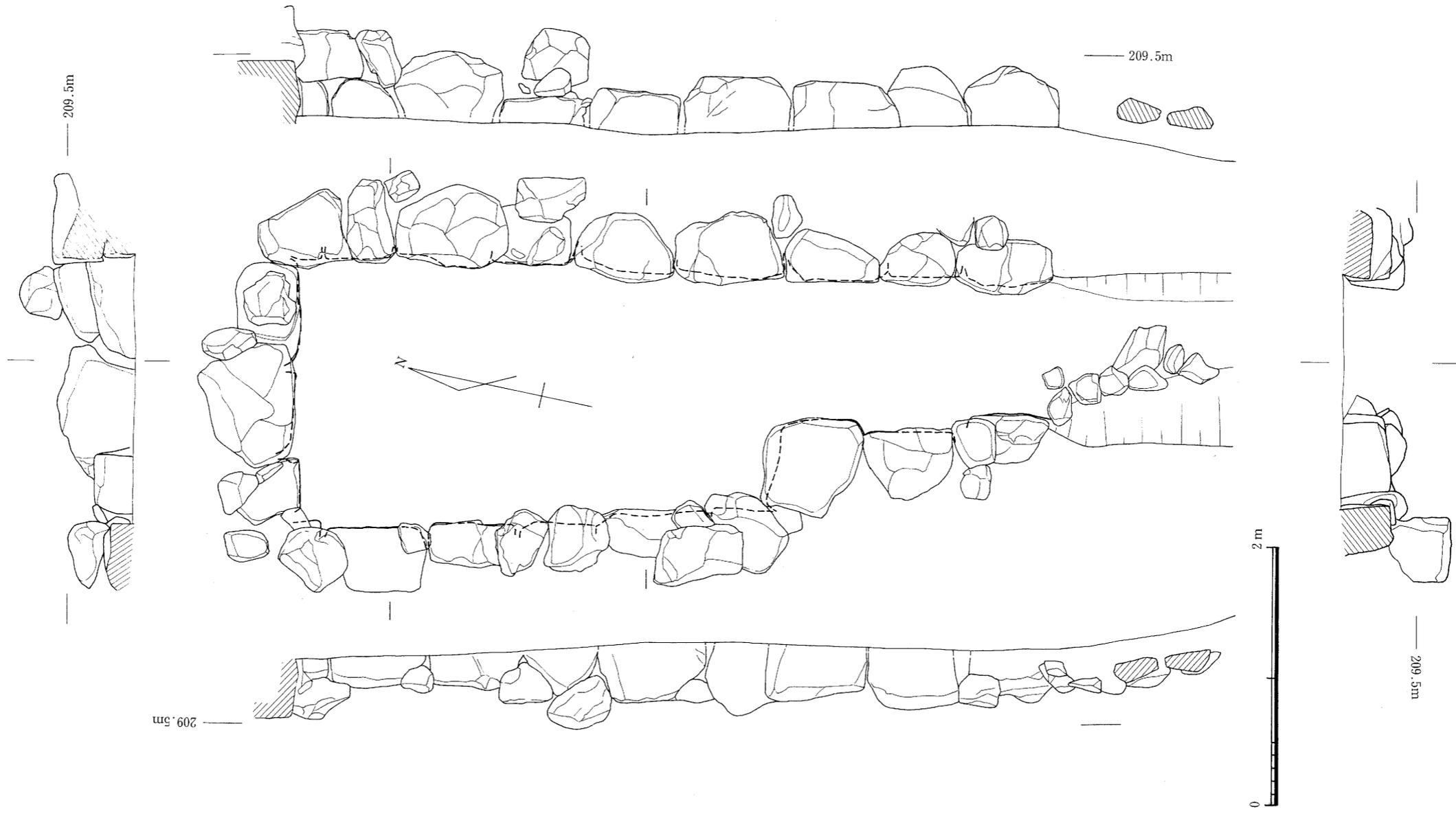


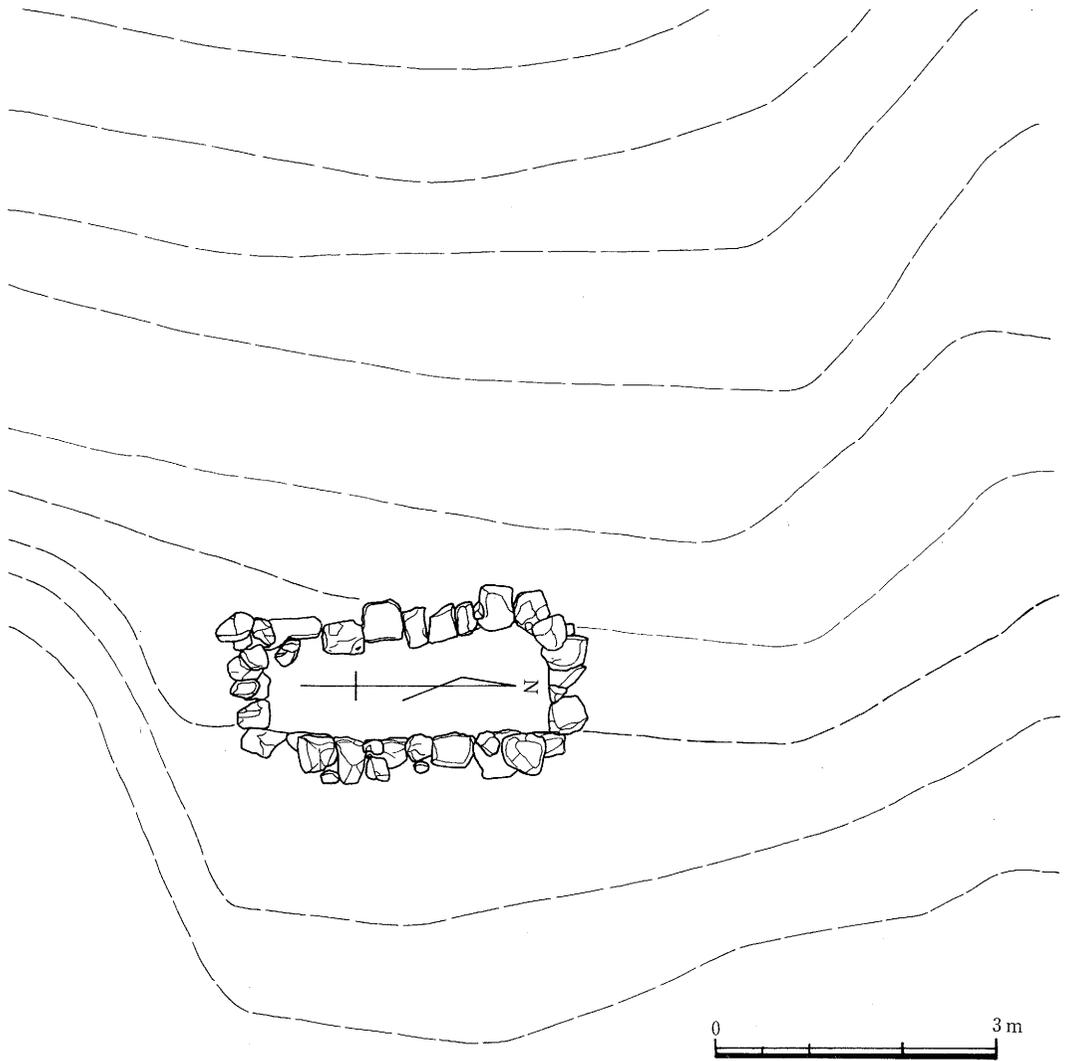
- 21. 緑灰色シルト
- 22. 黄褐色粘土
- 23. 緑灰色シルトと
灰茶褐色砂質の混層
- 24. 灰黑色粘土

- 19. 黄灰色粘質土
- 20. 緑灰色シルトと赤茶色砂質土の混層

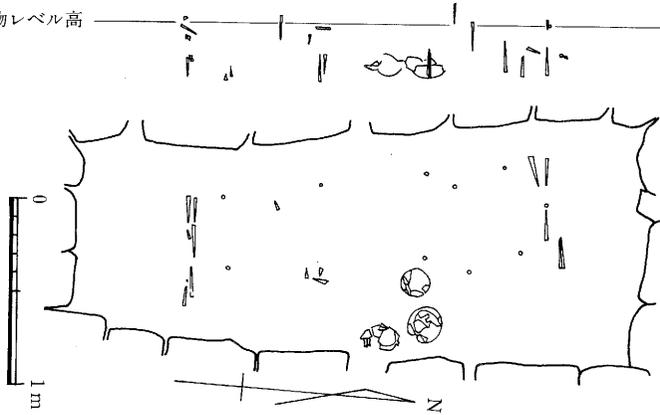


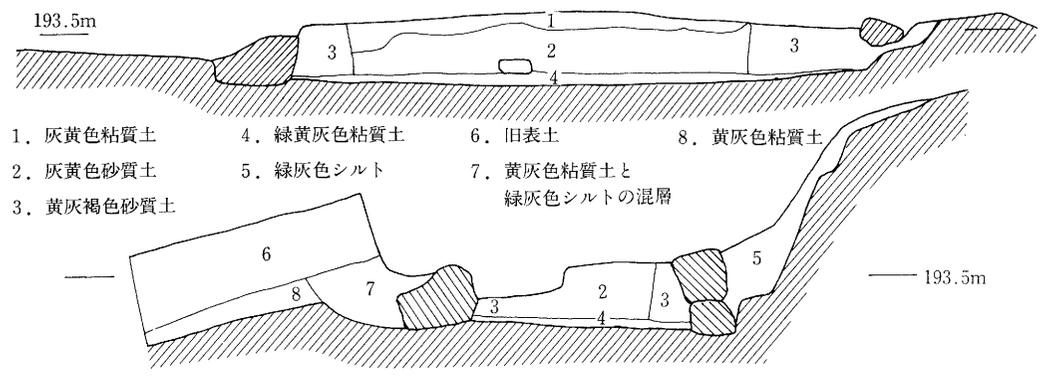
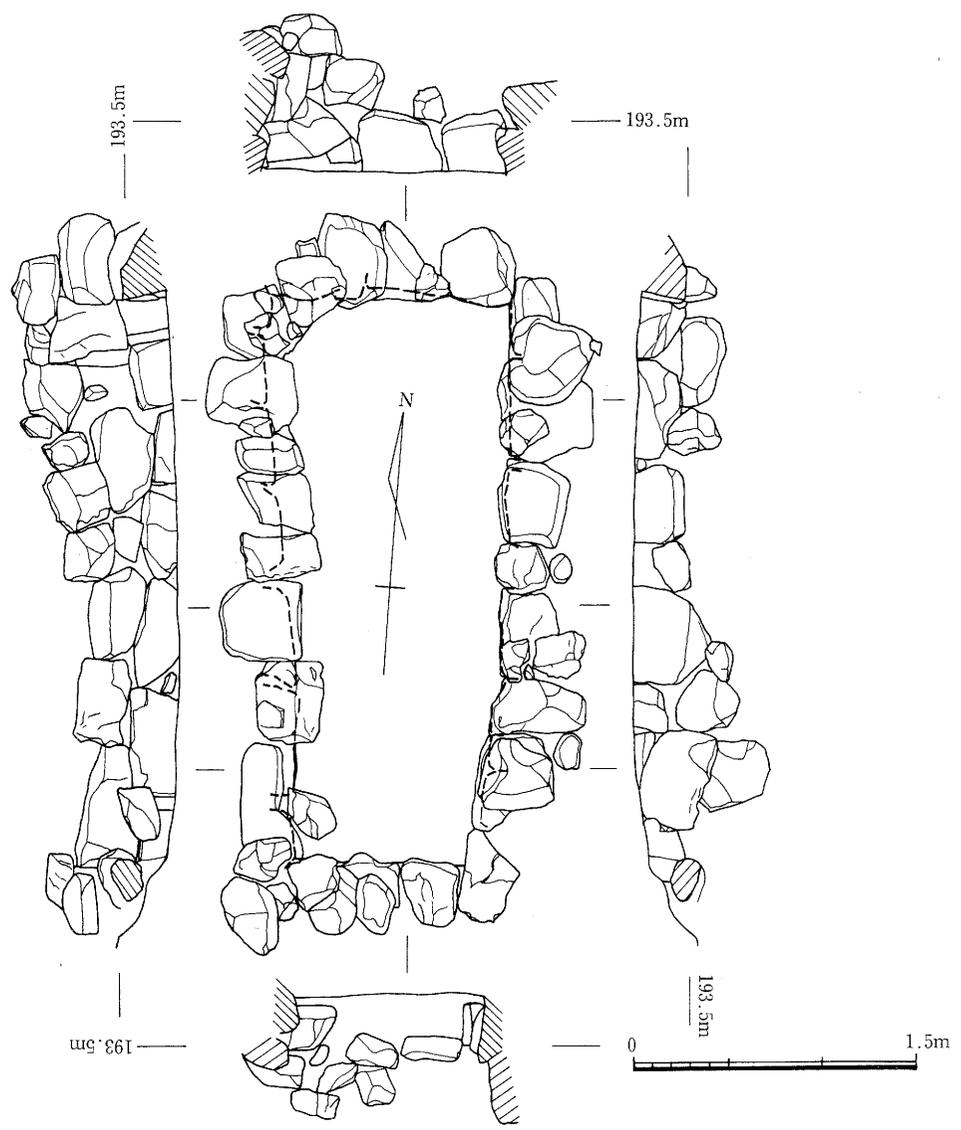
- 1. 淡黄灰褐色粘質土
- 2. 薄茶灰黄色粘質土
- 3. 黄灰色粘質土
- 4. 緑灰色シルト
- 5. 黄緑灰色粘質土
- 6. 黄褐色粘土
- 7. 緑灰色シルトと黄灰色粘質土の混層
- 8. 淡黄灰色粘質土
- 9. 黄茶灰色粘質土
- 10. 黄灰色粘質土
- 11. 黄緑灰色砂質土
- 12. 緑灰色シルト
- 13. 緑灰色シルトと黄灰色粘質土の混層
- 14. 緑灰色シルト
- 15. 13と同じ
- 16. 表土
- 17. 黄褐色粘質土と灰白色粘質土の混層
- 18. 灰黄色粘質土

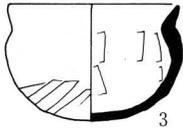
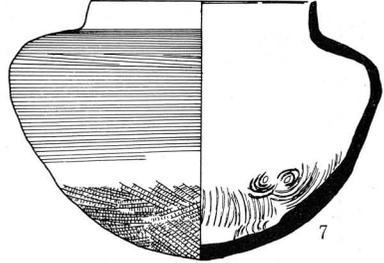
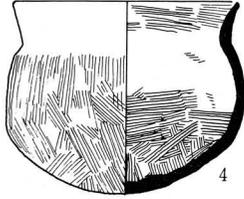
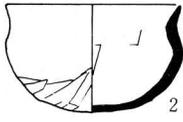
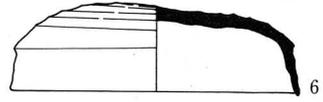
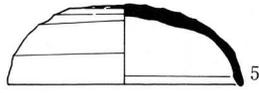
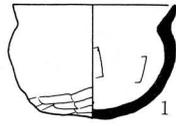




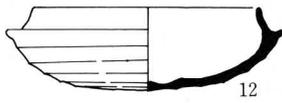
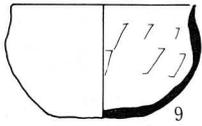
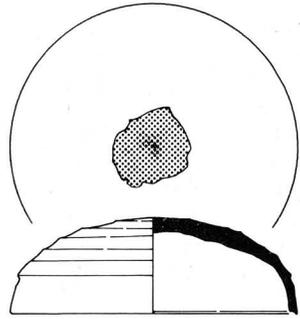
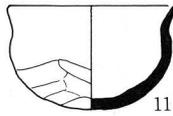
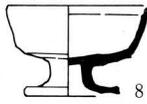
出土遺物レベル高 193.5m



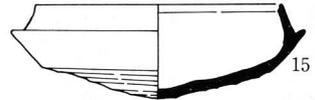
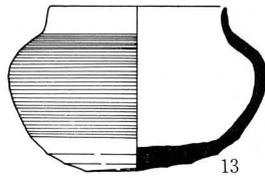




15支群10号墳出土遺物

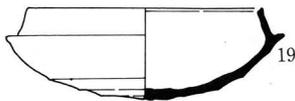
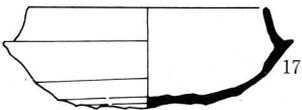
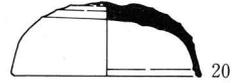
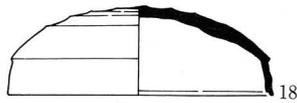
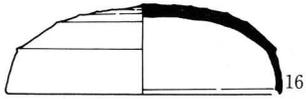


15支群11号墳出土遺物

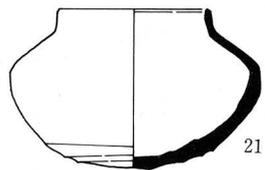


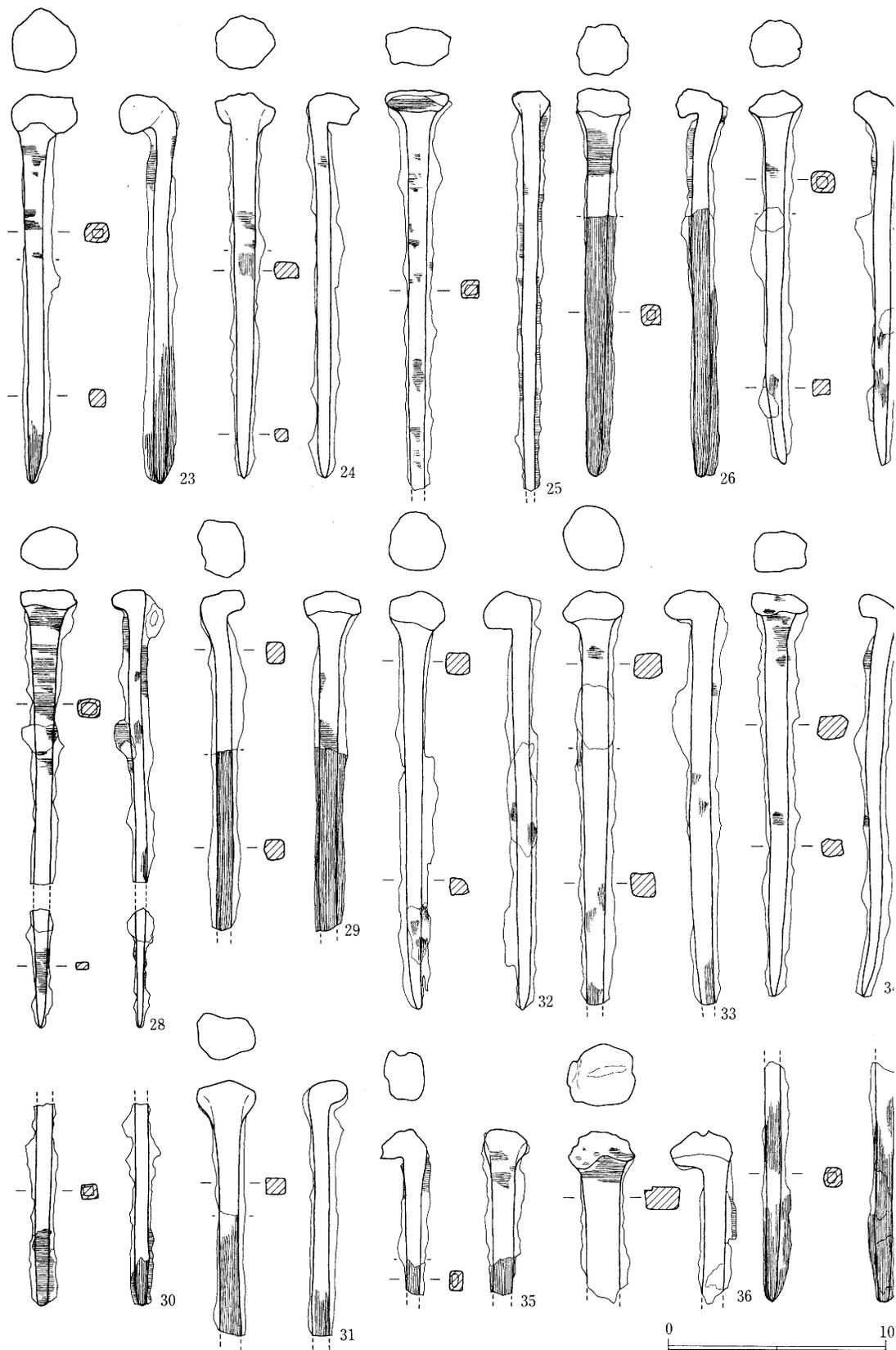
27支群1号墳出土遺物

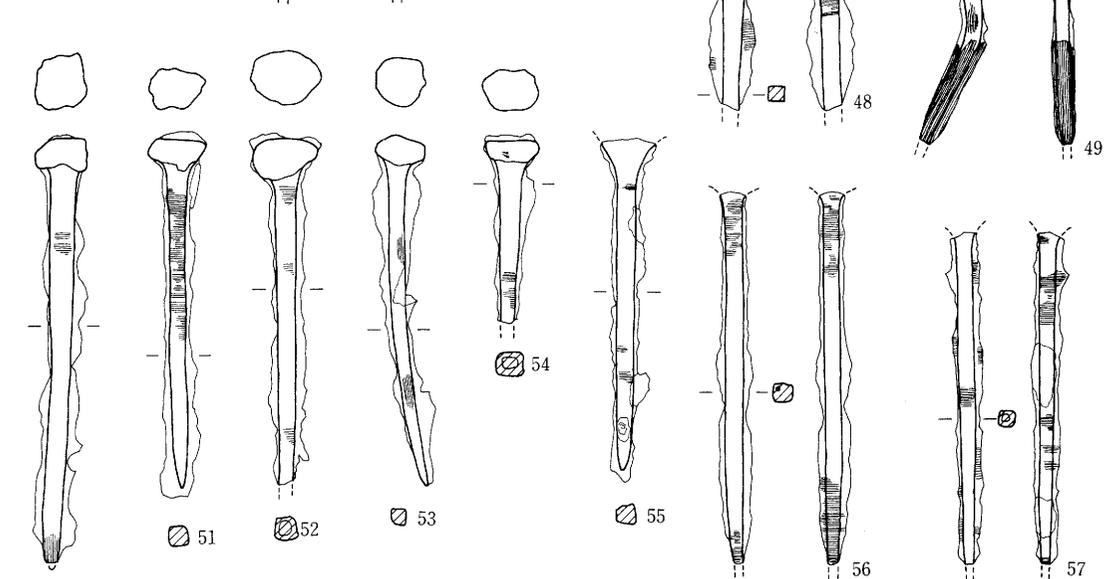
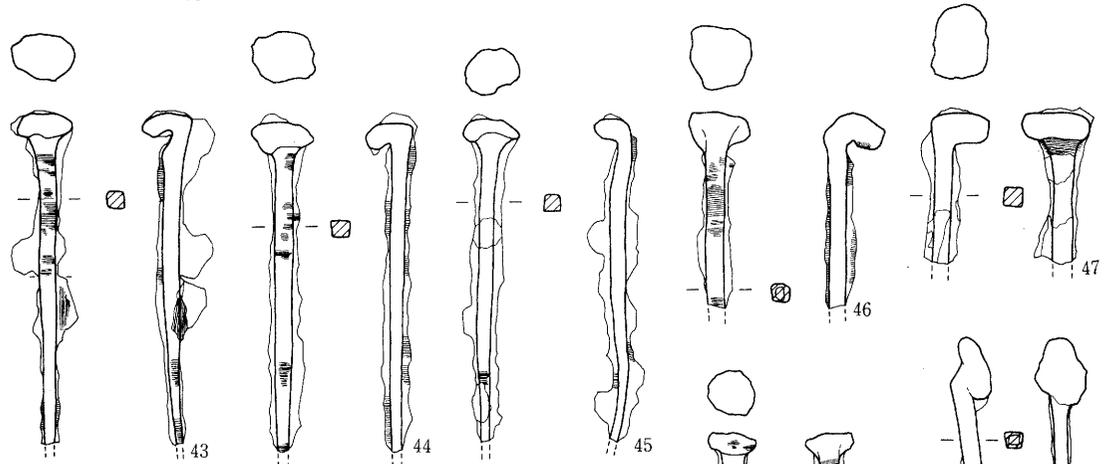
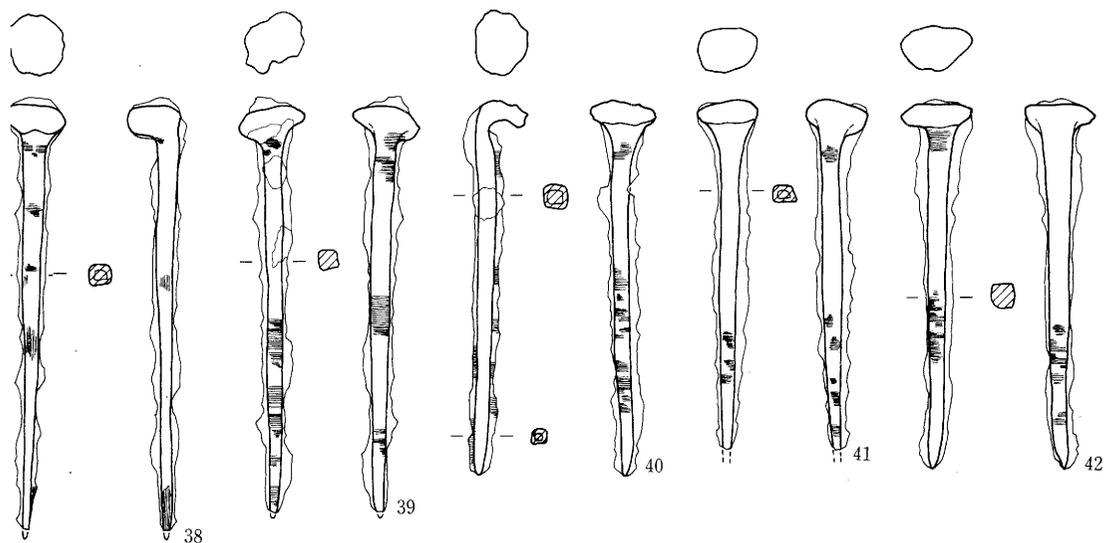
27支群2号墳出土遺物



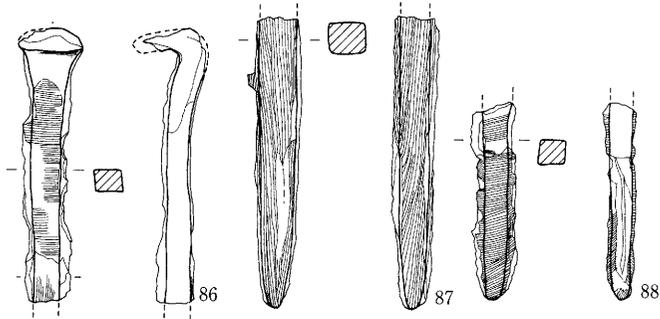
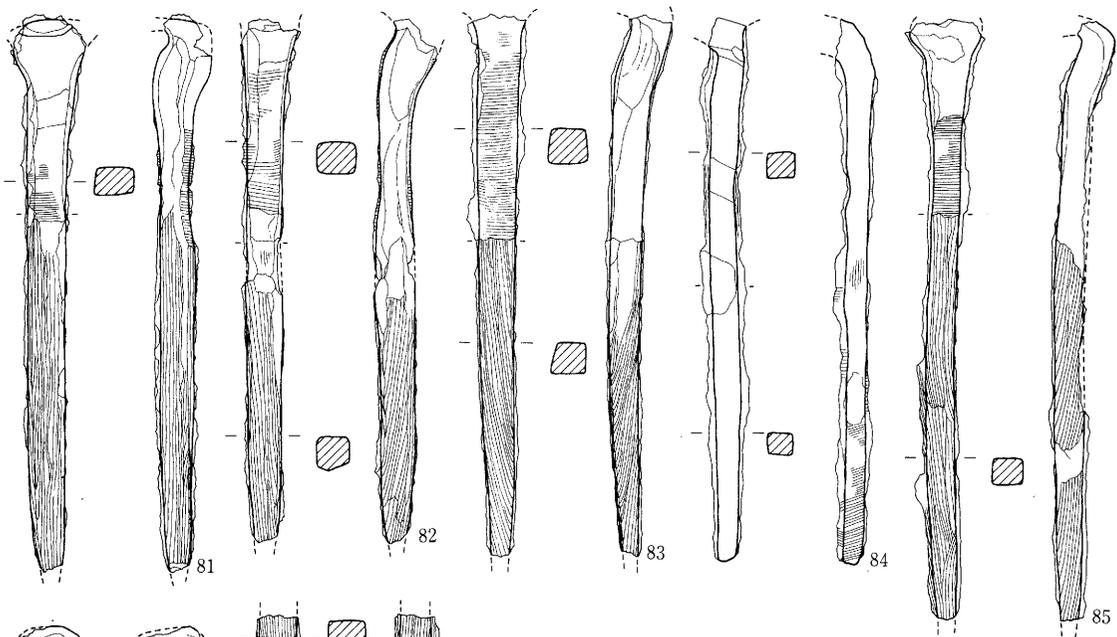
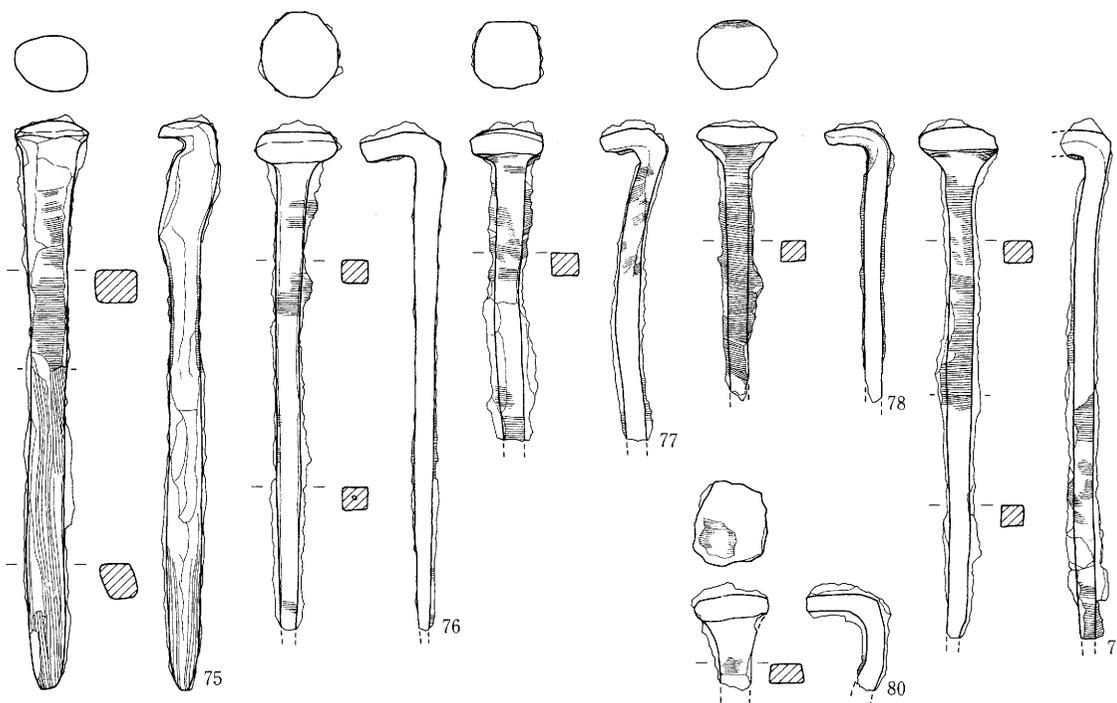
27支群3号墳出土遺物



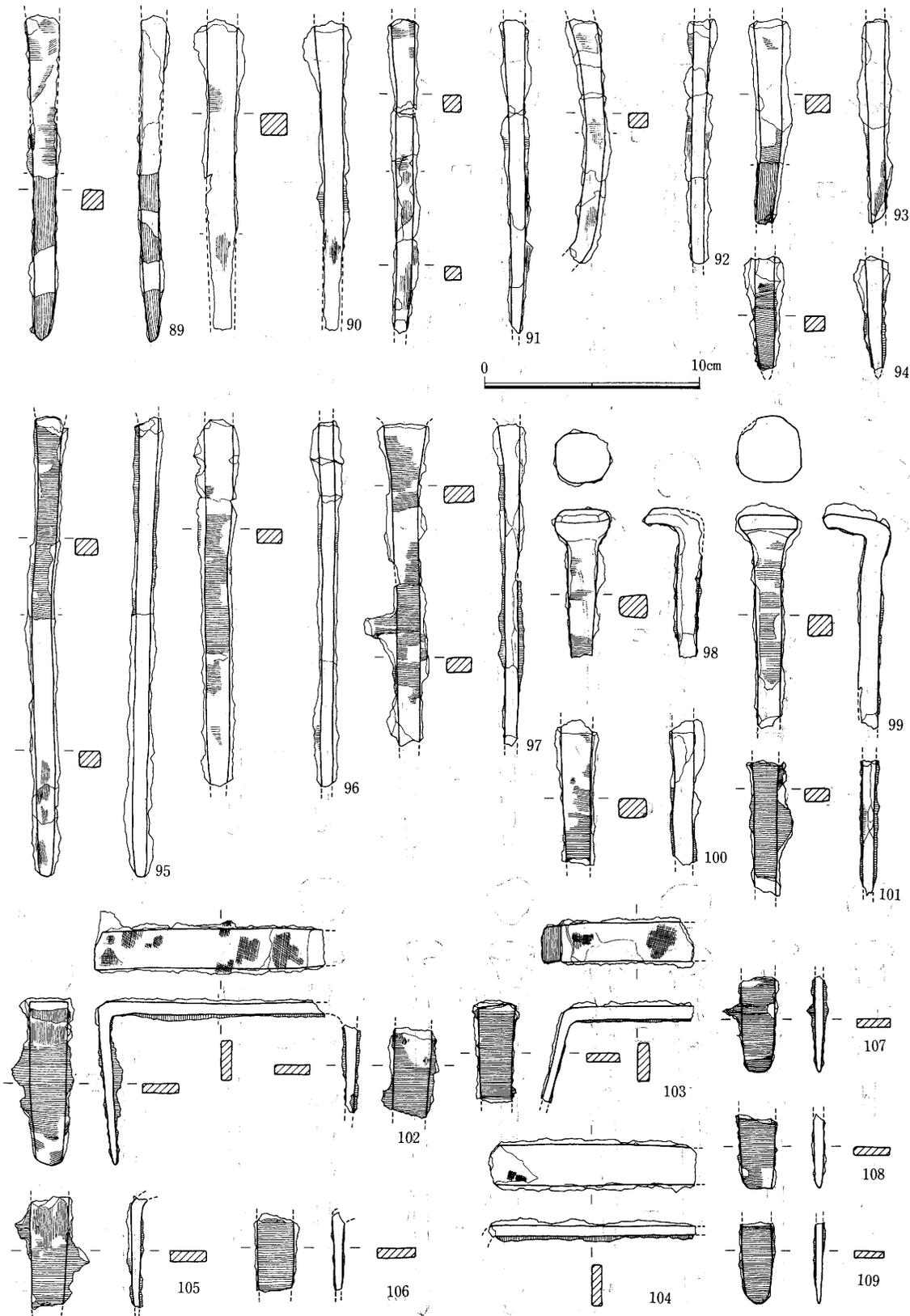


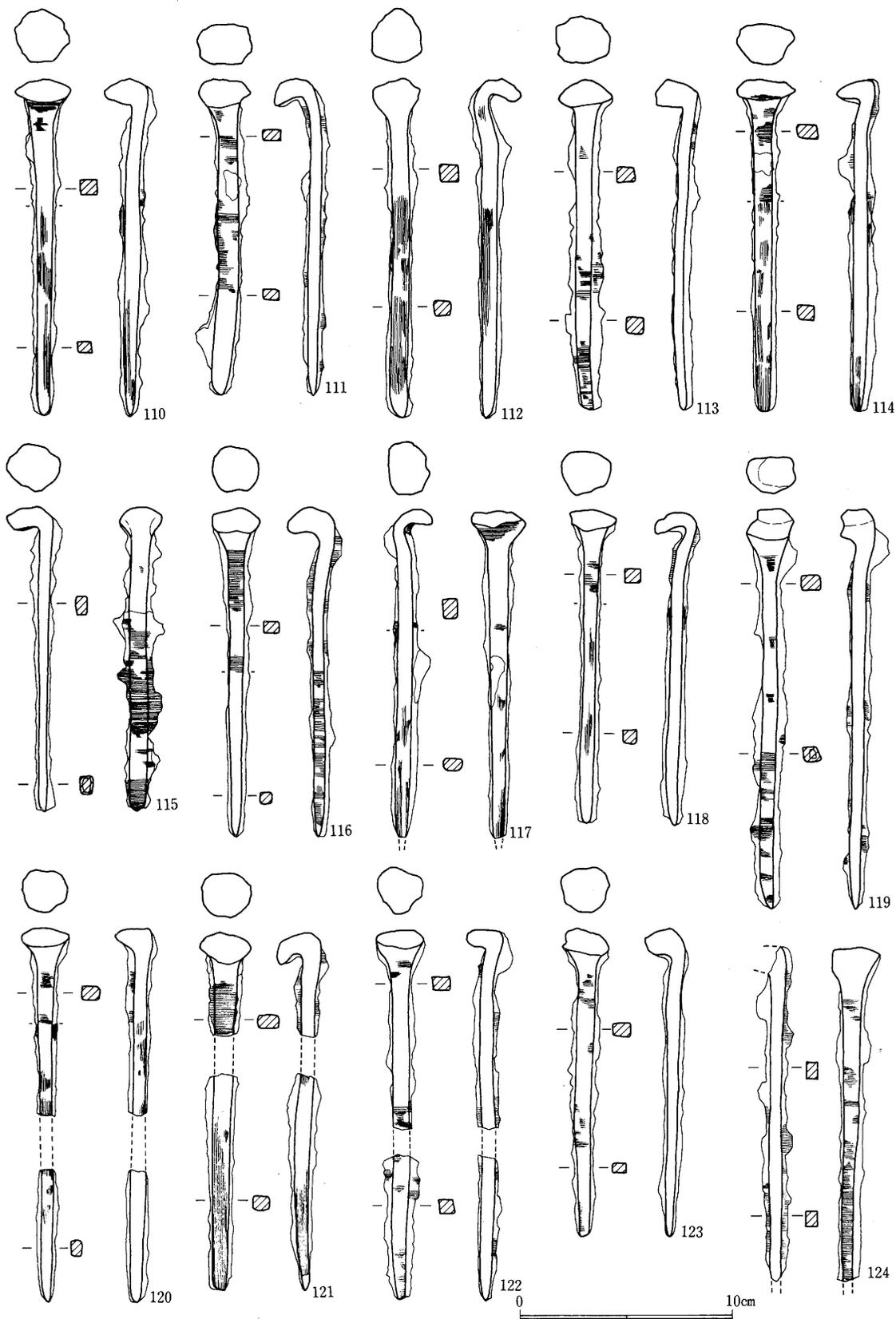


0 10cm



0 10cm







南東方向から望む



西側尾根全景



西側尾根北西から



西側尾根南西から



第8トレンチ



第31トレンチ



古墳全景



石室全景



人骨出土状況



鐵釘出土状況



古墳全景



墓道



検出状況



石室全景



石室から墓道を望む



遺物出土状況



土器出土状況



検出状況



床面検出状況



石室全景



排水溝



周溝内土器出土状況



西側から望む



調査前（南から）



調査前（北から）



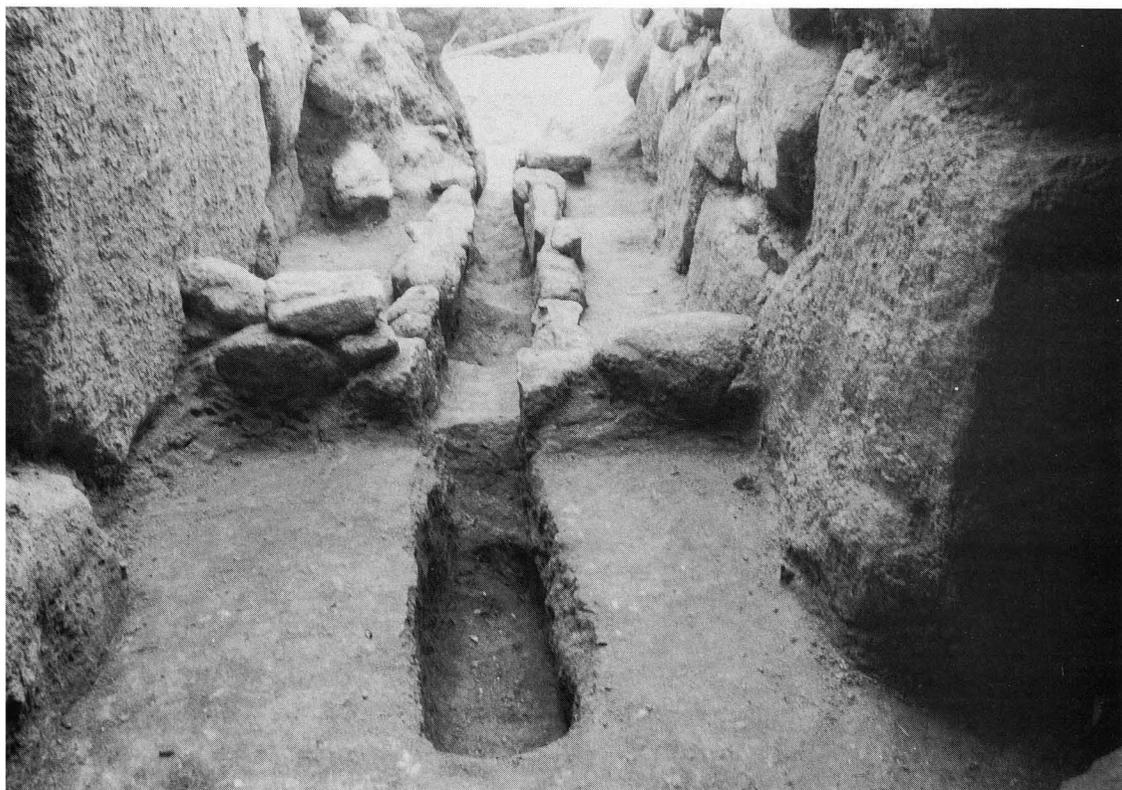
古墳全景



古墳全景



石室床面



排水溝（玄室から）



東壁持送り部分



奥壁全景



排水溝検出状況



蓋石除去後



調査前（南から）



石室全景



遺物出土状況



土器出土状況



石室東側裏込め



石室西側裏込め



古墳全景



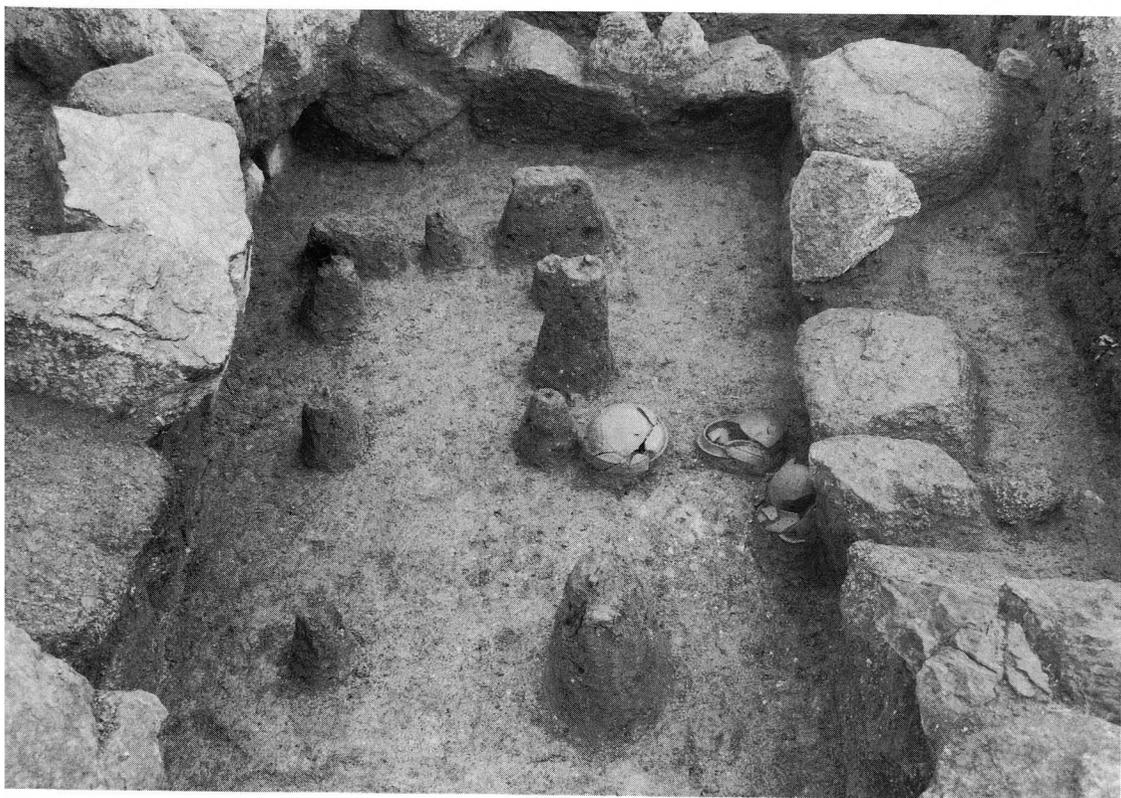
検出状況（北から）



石室全景



石室全景



遺物出土状況



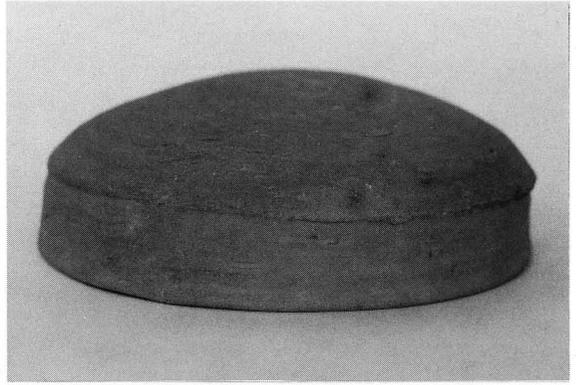
土器出土状況

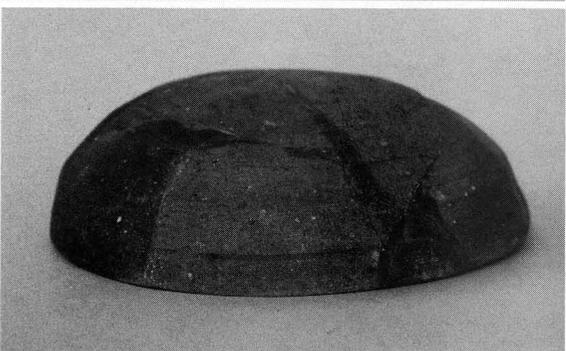
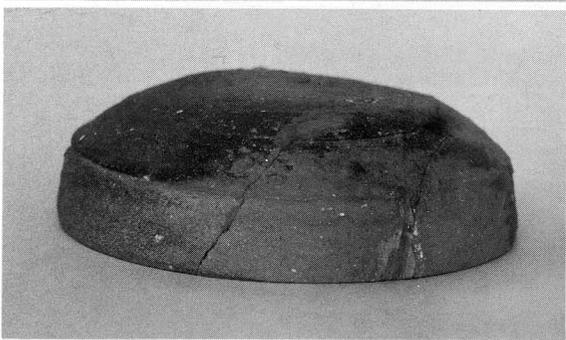
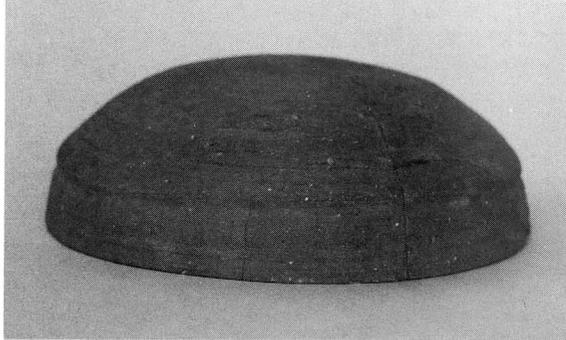
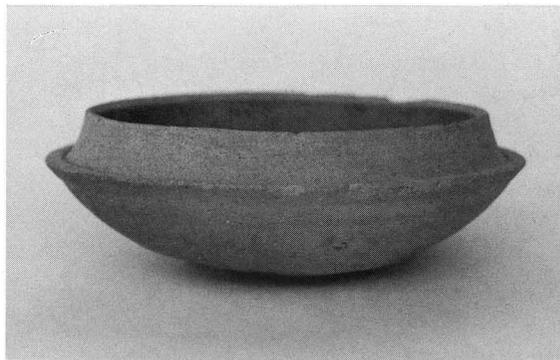
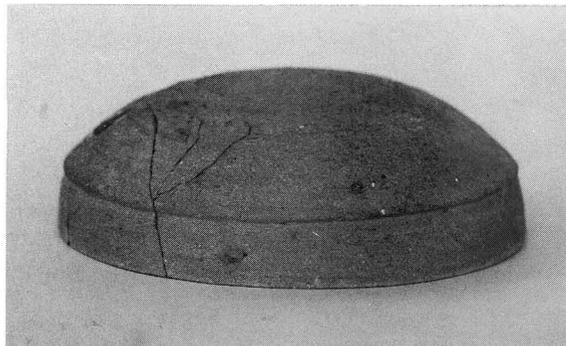


全景（南から）



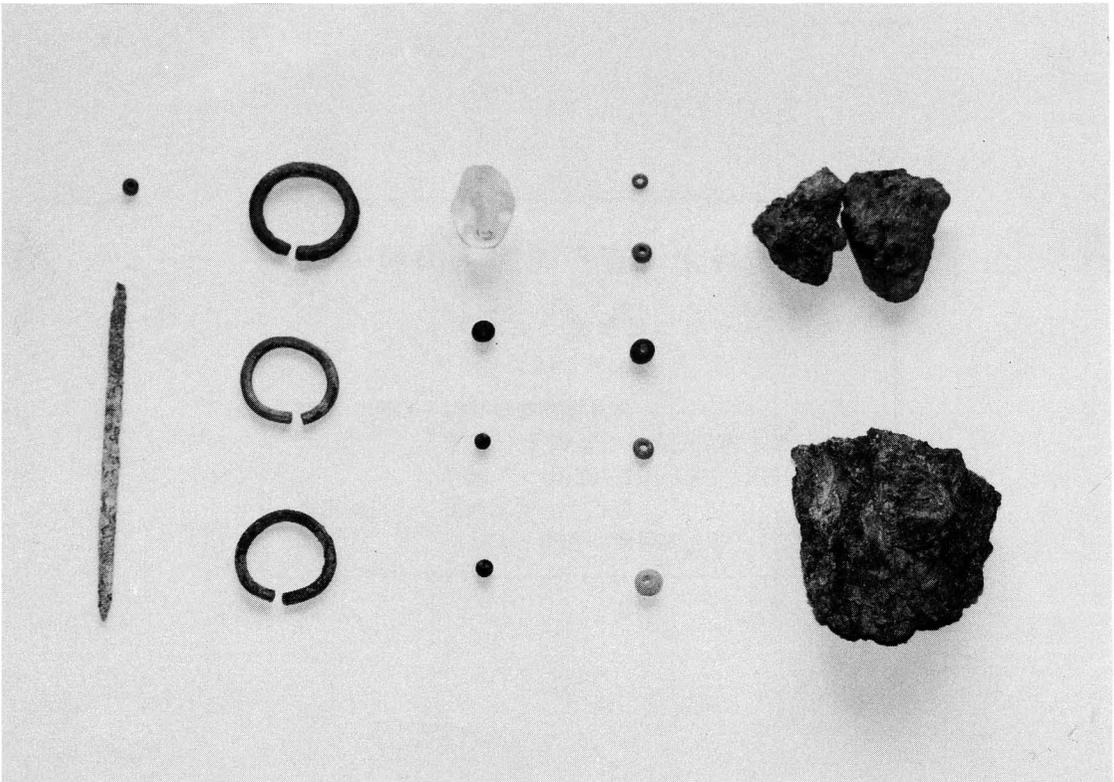
全景（南東から）







第27支群2号墳出土鉄釘



かんざし・耳環・玉類・鉄滓

平尾山古墳群平野・大県支群

—ミニゴルフ場建設に伴う—

1991年度

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪市柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501 内5133
発行年月日 平成4年3月31日
印刷 サンケイ総合印刷株式会社

